

して長く溜つた敷島の灰を、土間へ落とした。

『どうしてまた、今時そんな恐ろしいことが出来るんでございませう。』と、老母はもう押し進める餘地のなくなつた膝を、敷居の上で、もじ／＼させつゝ言つた。

『なんしろよく人氣の揃ひますところでございますね。若い衆が一人、何か悪いことをいたしましたし、でも、村中が寄つて、集つて庇ふんでございますから、手が付けられません。』と、稲村は心細いことを言つて、今から三四年前、稲村の近所の娘で、目黒小町と呼ばれた美しいのが、行方不明になつたので、てつきり姥ヶ谷の仕業といふことは分つてゐても、證據はないし、辱かしめられた上、殺されたのだと思はれるけれど、死骸の分らないのは、餘ほど巧みに、村中が申し合はして、始末をしたに違ひないと、探偵小説のやうなことをも話して、一同の顔の色を變へさせた。

『それぢや、そろ／＼まわりませう。』と、稲村に腰を上げられても、龍子にはまだ外出の支度が出来てゐないばかりか、誰れも顔さへ洗つてゐるものがなかつた。

一としきり、大騒ぎをして、朝飯もそこ／＼に、龍子は、フェルトの草履が、表へまで昨夜の雨水を吸ひ上げてゐて兎ても穿けないので、老母の黒い鼻緒の駒下駄を借りた足元を氣にしながら、だいぶ待たせた稲村の後から、小池と二人で出かけた。新三郎も行きたがるを、無理に止めて、母親の様子

を見させに堀留へ歸した。

氣になる足元を見ると、同じ九文三分の、これも老母のを借りた白足袋が、親指の上の綴つてあるのも厭やになつたけれど、田舎道だからと辛抱して、いつだツたか、梅の花の咲く頃、小池と二人で來た道祖神の石像の立つてゐるところから左へ曲つて、またどいぶ行つた。スルト、若葉、葉の中にとど一つ埋み残されたまだ眞白な富士の山の姿が、正面に見えた。姥ヶ谷も、もう近いのであらうと龍子は轟ろく胸を押し鎮めつゝ、行く手の繁つた森を見渡した。

四

大江山の鬼退治といふやうなことを思ひ出しながら、龍子は稲村の後から、足になじまない借り物の駒下駄を引き摺りながら進んだ。小池が其の後に、下手な口笛を吹きつゝつゞいた。同勢三人では何んだか心細いやうであつた。

『うすぐでございますか。』と、龍子は胸のドキ／＼するのを押さへて、稲村の背後から聲をかけた。なるだけ木蔭を選つて歩くやうにしてゐるけれど、初夏の強い太陽の下に、洋傘のないのが、敵の前に武器を失ふたよりも難儀であつた。

『まだもう少し、あの森の向ふになつて居ります。』と、稲村は眩しさうにして、行く手を指さした。富士の山がくつきりと白く、其の指の先きに引ツかゝつてゐるやうに見えた。

『あッ。……』と、少し考へて、『わたし、ちよつと、わすれ物をして來ましたから、一とツ走り行つてまゐります。ぢき來ますから、こゝでお待ちなすつて下さい。』と、氣の急ぐ風で言ふなり、稲村は栗とも思はるゝ繁つた樹の下に二人を立たせておいて、一散にもと來た道を走つて、森の緑りに姿は忽ち見えなくなつた。

『どうなすつたんでせう。』と、龍子は少し呆れた。こつちから言葉を返してゐる暇もなく、稲村の走り出しかたが早やかつたのである。

『何んか取りに行つたんだらう。』と、小池は仰いで、毛蟲でも落ちて來さうな枝の繁りを見た。

『怖かなくなつて來たんで、逃げておしまひになつたんぢやないでせうか。』と、龍子は、稲村の姿を吸ひ込んでしまつた後の森を振りかへつて言つた。

『そんなことはない。……だけど寂しいね、ずるぶん。この眞晝の天氣のいゝ日に、人ツ子一人通らないんだね。』と言ひく、小池は、昨夜の嵐のあとに散亂してゐる青い木の葉や、ひれ伏してゐる薄の新芽の長いのを眺めてゐた。このあたり、森と森の間には、田畑も妙なく、荒涼たる昔しの武蔵野

の面影が、昨夜の嵐の名残の中に偲ばるゝのであつた。

『あの方は、ほんとに親切な人でせうか。』と、龍子はまた後の森を見詰めた。

『親切な人だよ、それは。……』と、龍子は、秋を待つて人を招く尾花になるべき青い薄の中へ丁度芝居の波布を踏むやうにして入つて行つた。さうして、『あれで二十歳代の時分には、なか／＼道樂者だつたさうで、田地を賭けて博打をしたんだね。この邊の百姓は皆な金がないから、昔しは田地を賭けて博打をしたんだつてね。それで負けた者は、正直にちやんと、その田地を登記まで濟まして、勝つた者に引き渡したといふから、面白いね、あの稲村といふ人も、博打で田地を取られなかつたら、今はもつと／＼大地主で納まつてゐられたんださうです。なんしろこの邊の田地は、米なんか碌に取れやしないし、持てあましてたのが、東京の街の擴がるお蔭で、値が出て來たんだから、ほんとに棚から牡丹餅さ。大勢の力で自分の財産に價が出て來たのを、自分一人でせしめて、それを別に何んとも思はないんだから、可愛いゝさ。田地を賭けて博打をするやうなものでね。』と、小池は理窟張つたことを言つて、果ては腕を組んで考へ出した。

其の時、龍子がまた後の森を振りかへると、若葉青葉の中から、稲村の姿が小さく、遠見に現はれて來て、にこ／＼笑つてゐるのがよく分る。手には何やら細長いものを持つてゐる。

「どうも、お待ち遠さま。」さう言つて近づいたのを見ると、なんだか持ちにくさうにしてゐるのは、三年も前に流行つた馬鹿に柄の長い洋傘の袋に入つたまゝなので、善良な稻村は、龍子の綺麗な顔の日に焼けるのを氣の毒がつて、一とつ走り、娘お咲の大事の品を取りに行つて來たのであつた。

五

せい／＼息をはづませつゝ、稻村が袋をとつて龍子に渡した洋傘は、紫地の琥珀に、廻りへ透かし入りの白い刺繡をした、淺張りの、だいぶ舊式なもので、すてきに長い其の柄とゞもに、少し龍子をうんざりさせたが、しかし、稻村の好意と厚情とには、涙のこぼれるほど、感謝を捧げたかつた。

「流行おくれの古物で、お翳しづらいでございませうが、無いよりいゝと存じまして。」といふのも、一層其の好意と厚情とを引き立たせる謙遜な正直な言葉であつた。

「どういたしまして、結構でございます。ほんとにお氣の毒でございました。拜借いたします。」と言つただけでは、まだ感謝の意味が足りない、龍子は思つた。

「さア、まわりませう。」と、汗を拭き／＼、また先に立つ稻村の後から、龍子はパツと洋傘を擴げてつゞいたが、若しこれが自分の翳し料のあれであつたら、大好きなフランス縮緬　ローズと水淺黄と

が、新緑の中に半開の大きな花を見るやうであらうなぞと考へて、今自分の頭の上にあるものが、色合ひは兎に角、淺張りに開き過ぎてゐるのも氣になつた。

「わたし、日に焼けたでせう。」と言ひ／＼、龍子は、小池と相合傘になるほど、近くへ寄つて、惜し氣もなく、顔をまともに見せながら問うた。

「いゝえ、別に焼けてやしない。相變らず白くて、美しいよ。」と、小池は眩しさうに龍子の顔を見つづ言つた。彼れとしては、こんな近くで、こんなによく彼女の顔を見るのは、恐らくこれが最初かも知れなかつた。

「あら厭やだ！」と、龍子はこんな場合に、矢張り普通の娘が言ふことよりほかは言へないのであつた。

「でも、洋傘の色がわるいから、顔の色もわるく見えるよ。」と、小池が二間ばかり先きを行く稻村の耳に遠慮もなく大きな聲で言つたので、龍子は横目に睨んで、「聞えてよ。」と、戒めた。

「おしやれだねえ。……」と語尾を引ツ張つて、小池は、「こんな異常な時にでも、日に焼けるとか、下駄がどうだとか、洋傘が氣に入るとか氣に入らないとか、そんなことばかり氣にしてるんだね。家から火事が出て、龍子さんはきつとお化粧をしてから逃げるだらう。」と、小池は精いつばい皮肉の

つもりで言った。

「え、さうよ、わたし。……死ぬ時はちゃんとお化粧をして死にたいと思ふの！………だけどそれを、たゞおしやれだとか何んとか言つて、平凡な娘さんのすることゝ一緒にされちや、禍ひよ。わたしたちの、着物の縞柄を一つ選定するにしても、それが或る生活の主張になるんですもの。單におしやれと混同しちまツちや、仕様がないわ！」と、龍子はしんみりとした調子になつた。

「それは解つてるさ。……しかしどうも其の心持ちは、口で説明が出来ないね。言つたツて解らないものには解らないから。……世の中の娘は、矢ツ張り、自分たちが着物を欲しがるとも、龍子さんのそれも同じだと思つてるよ。」

「それや、さうよ。」

話のうちにだいぶ歩いて、丘を一つ越えた。先頭の稲村が立ち止まつて、「こゝからです、姥ヶ谷は。」と言つた時は、二人とも慄然と身體の縮むのを覺えた。兩方に小山のやうな森がつゞいて、今歩いてゐるのは、其の谷間であつた。富士は見えない。

「これが昔し、人を焼いたところです。ちよつと御覽になつたら、よろしいでせう。」と、稲村は氣味のわるいことを言つて、右の方の丘を登りかけた。四邊に人家はまだ一つも見えないで、何んとなく

腥い風の吹くやうな氣がした。

六

龍子は小池と顔を見合せた。稲村の後から跟いて行かうか行くまいかを、眼で相談したのであつた。すると小池は、自分一人だけ跟いて行くから、あなたはこゝで待つておいで、といふ目色をして、急いで丘を登つて行つた。稲村の尻端折つた長い足は、もうだら／＼坂の三分の一からも上にあつた。

しかし、龍子は、この寂しいところへ一人置かれるのが、昔し人間の死骸を焼いたとやらいふ場所を見に行くよりも厭やであつた。空にはだいぶ黒い雲が現はれて来て、先刻の拭つたやうな一面の蒼い色へ、ところ／＼墨汁をこぼしたといふ風になつたけれど、其の黒い雲をば巧みに避けて、太陽の強い光りは、一分間の日蔭をも作らないで、むし／＼と重苦しい蒸發熱を立てるので、草木も人も茹だりさうに暑い。

人の足音がしたから、妙にぎよツとして振りかへると、天秤棒をしな／＼と、嵩高の荷を擔いだ人相のよくない男が森を出て、細道をこつちへ近づいて來るのであつた。ガア／＼と、擔がれた荷はやかましく鳴いてゐる。牡牝の鶏がドツサリ、浅い籠にイツぱい詰められて、覆はれた網に、首もあげ

られないで苦しんでゐるのであつた。其の塗炭の苦しみの中で、眞ッ赤な鶏冠の牡と牡とが、嘴で窮屈な戦ひをして、頭の上の太い網の目をば、血潮に染めてゐるのを、路傍の小笹の上に立つて、道を譲りながら見た龍子は、言ひ知れぬ痛ましい氣持ちになつて、眼鏡が涙に曇りさうであつた。夥だしい鶏を擔いだ男は、凄い眼でじろりと龍子を見て、不審さうに小首を傾げたが、天秤棒の肩をかへて、さつさと行き過ぎてから、また振りかへつて、凄い眼光を龍子に向けた。

龍子は、ぞつと身慄ひのするのを覚えながら、二人の登つた丘を仰ぐと、小池がにこやかに手招きをしてくれた。穿き馴れぬ駒下駄を赤土に滑らしつゝ登つて行くと、十坪ばかりの平地になつてゐて、青い草の繁つたのにまじつて、こんなところに不似合ひな苜蓿クローバの少しばかり白い花を見せてゐるのが、龍子には哀はれに感じられた。

「この下です。」と、稻村が指さしたのは、それから向うへきた四五間下りになつただら／＼坂のあたりに、細い胡麻竹のだらしたく伸びてゐる藪で、其の前の一間四方ぐらゐな四角い穴には、昨夜の雨の溜つたのが、ギラ／＼と油ぎつて見えてゐた。稻村が下りて行く後から、二人は氣味わるさを胸いッぱいに貯へつゝ、跟いて下りたが、雨水の溜つた四角い穴は、周囲を丸い石で疊んで、黒く煤けた痕が、剝げかけて残つてゐた。

「この穴で、人を焼いたんでございます。新式の火葬場が出来ますまでは、こゝで焼いて骨にしたんですが、残りの骨がよくこの藪の中に捨て／＼ございました。」と言ひ／＼、稻村が細い竹の倒れたり起きたりしてゐる藪に眼を注ぐのに倣つて、二人の眼もいよ／＼氣味わるさうに、そつちを向くと、三人の眼へ同時に映つたものがあつて、龍子と小池とは齊しく、

「あッ。」と、同じ叫びを立てた。

それは數の中の、胡麻竹に引ツかゝつてゐるフェルトの草履を見たからで、龍子が昨夜雨水に濡らして穿けなくしてしまつたのとお對の、武子が穿いてゐたものに違ひなかつた。

「これにお心あたりがおありになりますか。」

稻村は平氣で、胡麻竹を掻き分けて、蛇がとぐろを巻いてゐさうな藪の中へ、ガサ／＼と入つて行つて、片足の草履を摘まんで見せつゝ、かう言つて、もう片足ありさうなものだと、探し廻はつた序でに、長いこと雨露に晒されたらしい白骨の、細長いのを一本蹴り出した。

七

「あらッ。」と叫んで、龍子は足もとへ轉がつて來た白く細長いものから、三尺も飛び退ひきつた。さっし

て、怖々眼を向けると、白いには白いけれど、だいぶ黒ずんでゐて、胡麻竹のやうな黒い小さな斑紋も出来てゐた。中が筒になつて、昨夜の雨か、前々からの夜露か、溜つた水が、少しばかり流れ出してゐた。

「只今はなか／＼これだけのものが出てまゐりません。珍らしいでございます。」と、稲村はしげ／＼其の細長い白骨を見て、頻りに眉を擧めたが、この人にはどうしても、骨董品を鑑賞するといふやうな心があるらしく、フェルトの草履片手に、白骨をば深ゴムの靴の先きで、ころ／＼轉がしてゐた。

「誰れかこの邊をいぢりましたね。それでこんなものが出て来たんでございませう。いぢつた痕は、あの大雨で消えてしまひましたが、昨夜あたり、だいぶこの邊を掻き廻はしたものがあつたに違ひございませぬ。」と、稲村は大地を見詰めて、じつと考へ込んでから、「して見ると、この邊にぐす／＼してゐちや、よろしくございませぬ。」と言ひ／＼、また眉を擧めた。この人にこんなことを言はれると、龍子も小池も、氣味わるさ、恐ろしさ、心細さがいや増して来た。

みんな白骨の方に心を取られて、フェルトの草履の方を忘れてゐたが、こんな重要な手がかりを得た以上、武子がこの邊へ攫はれて来たことは確かだ、あの手巾と／＼もに大事な證據品となつた。「ちよつと拜見！」と、さう言つて、龍子は稲村の提げてゐる草履に手をかけた。牡丹色の表から、

同じ色と白との半月鼻緒まで、皆な鹽瀬で、それが自分のと同じやうに、ずつぷりと水を含んでゐた。よく見ると親指や踵の當るところは、鹽瀬の地が少し摺れてゐて、劇場や音楽ホールの床をば、自分のと二足で、幾度踏んだか分らない姉の一番好きな履物に違ひなかつた。高山の庭での小園遊會にも姉の足にはこれが穿かれ、自分も昨夜濡らしたあれを穿いてゐた。

「お姉さま……」

さう言つて龍子は、稲村から受け取つた草履に頬摺りしたいやうな氣持ちになつた。こらへても、こらへても、涙が込み上げて来て、眼鏡を曇らした。美しい牡丹色の鹽瀬が雨に濡れて、色が濃くなり、強く握ると、これも雨で綺麗に土を洗ひ落したフェルトから、滴る露は、姉の涙かと疑はれた。「さア、まゐりませう。」と、稲村は何んだか氣が／＼りなことが出来たといふ様子で、沈んだ顔色をして、前ほどの元氣はなく、とぼ／＼と考へごとをしながら歩き出した。

いつの世に、どうして生きてゐた人か。男か、女か。それさへ分らない白骨に向つて、龍子は、「左様なら……」と言ひたかつた。土の下深く埋めて上げたいと思つた。世にある時はいづれ泣いたり笑つたり喜んだり怒つたりしたのであらうと考へると、果敢なく、また哀しくなつて、姉を想ふ涙と／＼もに、白骨を憐れむ涙が、兩方へ分れて、頬に傳うた。

それから三人は、黙り込んだまゝ、また一つ丘を越えた。青葉がくれに、里が見えて、それが姥ヶ谷であつた。遙か正面にある筈の富士は、龍の姿でも現はれさうな、恐ろし氣な黒雲に遮られてゐた。日はカン／＼と照り付けた。

「あれが、立松さんの別荘でございます。」と言つて、稲村が右手の丘を指さした時、

「稲村の旦那、何か持ち上りましたか。」と、太い聲をかけて、仔細あり氣に横合から現はれたのは、先刻凄い眼で龍子を見たあの嵩の高い鶏の荷を擔いた男であつた。龍子は覺えずきツと、身構へた。

八

稲村も、きツとなつて、其の男 見詰めたが、俄かにニツコリとして、「あゝ、誰れかと思つたら、直さんか。いゝ仕事があるかね、此頃は。」と言つた。しかしなか／＼油斷がならないと心を配つてゐるのは、其の身體の構へかたで分つてゐた。龍子も先刻はたゞ彼れの凄い目付きに恐れをなして、眼をそむけたのだから、つく／＼この男の様子を見なかつたし、それに嵩高い鶏の荷を擔いで、哀はれな動物にガア／＼と聲を立てさせてゐたから、其の方に心を奪はれて、人間に注意を怠つた傾きもあつた。ところが、今かうして、荷を卸して一本立ちになつて來たのを見ると、いかにも人を取つて食ひ

かねないやうな恐ろしい面構へで、毛むくぢやらの手も足も、太く固さうで、澁紙色をしてゐた。

「いゝ仕事どころか。長年殺生をした報いが來たと見えて、わしも此の頃は、身體の工合がわるくていけねえ。もう駄目だねえ。」と、ニヤリ笑つた顔は、憎々しかつた。しかし、さう言ふのを聞くと、成るほど巖丈な其の五體にも、どこかに衰へが少し見えて、脂氣の抜けた頭髮には、白いのがキラ／＼と、だいぶあつた。

「それにね、鼻アがくたばりやがつてな、昨夜。……」と、この夜叉のやうな男も、急に鼻を詰まらせた。

「おかみさんが亡くなつたのか。それやいけないな。病氣か。」と、稲村は驚ろいた顔をして、「丈夫さうなおかみさんだツたがな。」と、氣の毒さうに言つた。

「壽命で死んだんぢやねえんで。」と、夜叉のやうな男はまた鼻を詰まらせた。さうして、古井戸へ落つちやがつて。間拔けな阿魔だ。……でもあんな古井戸に蓋をしとかねえといふ法はあるめえな。」と、残念さうに齒ぎしりをした其の齒は、風體に似ぬ白さで、毒々しく赤い唇とゞもにまた、食人々種といふ綽名を想はせるものがあつた。

「古井戸へ落ツちちた？何處の古井戸だね。……いつのことだい、一體。」と、稲村は同じやうなこと

がよくあるものだとか考へる風で、首を傾けながら、いよ／＼不審の面地をした。龍子も小池と顔を見合はせて、少し身體を慄はした。手にしてゐる牡丹色の表のフェルト草履は、遣り場に困つて、背後へ隠してゐた。何んとなくこの草履はこの夜叉のやうな男に見せられないといふ氣がしてゐるのである。小池が背後から、ぐい／＼と魚が餌にかゝつたやうに、其の草履を引いたが、履子は稍や暫らく手を固くして離さなかつたけれど、小池の引きかたが餘りに刺しいので、遂に草履を小池の手に渡してしまふと、小池は手早くそれを自分の手巾に包んで、矢張り背後から、また龍子の手に握らせた。これでもう背後に隠してゐる必要はなくなつた。

「昨夜さ、あの雨の降る眞ツ最中によ。」と、夜叉のやうな男は、ツンと一つ手鼻汁をかんで、だんだんぞんざいな言葉になつたが、古井戸の場所は言はなかつた。

「今日葬式だといふのに、鶏を擔いで商賣に出るんだからな。佛も浮ばれのえよ。出なげや食へねえんだもの。」と、哀はれ深く言つて、其の男はすたく／＼と歩きかけたが、それは龍子たちの行かうとするのと同じ道であつた。

黙つて二丁ばかり、うね／＼した細道を行くと、豚小屋のやうな家に、人が大勢ごたく／＼してゐた。縁の下にも其の横の追ひこみにも、鶏が人間と／＼にも、ガア／＼騒いでゐる。それ等の人々は、鶏屋

の主人直さんと一緒に來た三人を、うさん臭さ／＼に見やつたが、わけても、塵溜めに鶴が下りた如く四邊を明るく見せるほど美しい龍子の姿に、餘ほど驚ろいたらしかつた。

鶏舎の上へ裏向けに乾してある、片足のフェルトの草履に、龍子は、逸早く眼をとめた。

九

「まア寄つておいでなさい、と言ひてえが、このさまぢや、お茶いツぺえ飲んでもらふことも出來ねえや。」と、夜叉のやうな男は、ニヤリ笑つて、物凄い眼光を稲村に向けたが、其の序でに、龍子たちをもじろりと見て、鶏と／＼にも住んでゐるやうな、其の家に歸つて行つた。家の前面の空地には、臨時に石を積んで大きな竈が拵へてあつた。それに鍋をかけて、火を焚き付けてゐるのは若い女で、矢張り赤いものを身に着けてゐた。

「お取り込みだなア。」と、稲村は軽く會釋して、足早やに大勢の人々の視線から遁れようとするので、龍子も小池も同じ步調で其の後につゞいたが、龍子はどうも、あの鶏舎の上に乾してあるフェルトの草履の片方を手に取つて見たくて、たまらなかつた。裏向けになつてゐるから、表の色が分らないけれど、どうやら牡丹色であるらしく思はれてならなかつた。

「險惡な顔をしてやがるな。どいつもこいつも」と、小池は思ひ切つて罵つた。それはもう、あの豚小屋のやうな家からは、眼も耳も届かぬ距離に來てからであつた。

「百姓といふものは、みんな顔が險惡になるのね、自然な平和な仕事をしてゐながら。」と、言つてしまつてから、龍子は稻村が農夫の出身で、矢張りどこかに險惡な相をとどめてゐるのに氣がついて、これはわるいことを言つたと思つた。

「都會人に壓し付けられて、苦しみ跪いてゐる顔なんだよ、あれは。……不味いものを食つて、汗水垂らして作つた必要品を、都會人に安く買ひ取られて、其の代りに、都會人から不必要な贅澤品を高く賣り付けられてゐると、あんな顔になるんだね。食人々種だなんて言つても、都會人の方が、よつほど食人々種だぜ、顔は優しくてね。」と、小池はまた例の言ひ草を始めたが、それはもう、龍子の耳に聒たがの出來るほど聞かされたことで、たゞ少し言葉が變つてゐるに過ぎなかつた。そんな小理窟を言ふよりも、この眼前の哀しさを、大きな美しい自然の中に、高らかと歌つて貰ひたかつた。……さう思つて龍子は、小池の手巾で包まれた片足のフェルト草履を見た。表の牡丹色が血のやうに、白い布片を透いて見えた。手巾を失うた小池は、頭に浸染む汗を、手の甲で拭いてゐた。

これと一足になるべきものが、あの汚ない鶏舎の上にあるのではないか、と思つて、龍子は、また

たまらない氣持ちになつた。

「今の汚ない家の、鶏小屋の上を見て？」と、龍子は息のはづむのを覺えながら、小池に問うたが、「見ないよ。何かあつたの？」と、手輕に言ふところを見ると、あの肝腎なものを見てゐないのだと分つて、龍子は失望した。稻村も黙つてゐるからには、あれに氣が付かなかつたのであらうと、龍子は獨りいらしくした。

「姥ヶ谷は、こゝまでゝす。」

さう言つて、稻村は、小川に架かゝつた土橋の上に立つた。足の下には、いづれ汚ないのであらうと思はるゝ水が、綺麗にちよろゝと流れて、麥魚でも泳いでゐさうであつた。

「立松さんの別莊の方へ行つてみませうか。池がございますから。」と、稻村は土橋の上にしゃがんで袂から敷島の残りを取り出した。

「食人々種の探檢も、これだけぢや、餘りに平凡だから、だいぶ疲れたけれど、行つてみませう、立松の別莊へ。……何か食物を持つて來ればよかつたなア。」と、小池は詰まらなさうにして、稻村の吐き出した白い烟りの行方を見てゐた。さうして、「武子さんの行方を探すのも、あの烟りを攫まうとするやうなものぢやないかなア。」と、心細いことを言つた。龍子は、あの鶏舎の上に乾してあつたフ

エルトの草履のことを、こゝで話さうか、話すまいかと考へて、四邊を見廻はした。

10

さも〜重大な祕密でも打ち明けるやうな物々しい態度で、鶏舎の上に乾してあつたフェルトの草履の片足のことを、辛うじて二人に聞えるだけの聲をして話したが、二人は別に驚ろきもしなかつたので、龍子は拍子抜けがした。勢ひ込んでこゝぞとばかり調子強く弾いた樂器の絃が、ブツリと切れて、豫期した音色の出なかつた時にも似た淡い哀しみに、胸を閉ざされた。そればかりか、小池は冷笑を浮べて、

「あゝあれか。あれは違ふよ。僕もちよつと見たけど、そんな上等のぢやない。この村の娘が穿いて出て、片方だけ濡らしたんで、あゝやつて乾しといたんだらう。百姓の娘だつて、フェルトの草履ぐらゐ穿くよ、都會から賣り付けられる高價なものゝ一種としてね。」と、事もなげに言ふのであつた。「若しそれが、其の片方でございましたら、幾ら何んでも、そんな人目につくところへ乾しとけやしません。」と、稻村も頭から龍子の話を打ち消さうとした。龍子は矢ツ張り話さなければよかつたと思つた。

下から屋根の見える丘の上の別荘も、登つて行くとなると、なか〜遠かつた。古びた茅の屋根が、いつしか青葉に隠れてしまつて、どの見當だつたか、さつぱり分らなくなつた。

昨夜からの疲れで、鉛でも詰めたやうになつてゐる重い足を引き摺りながら、龍子は些か不平らしい様子をして、「まだ遠いんですか。」と、硬い聲で問うた時、稻村はにっこりして、

「こゝでございます。」と、とぼけた風で、傍の木立の奥を指さした。そこには先刻から青葉の中に見える隠れてゐた茅葺きの屋根が、大きく中心を占めて、或る新らしい畫家の作品を思ひ出させるやうな、いゝ形に見えた。

「おや、開いて居りますよ。別荘の雨戸が。……今日は」と、稻村は眩しさうにして、孟宗竹の枝を束ねて拵らへた垣根のあなたを見た。こんな時、この人の顔にも、小池の言ふ險惡な相が現はれる。

垣根になつた孟宗竹の枝は、餘ほど古いものらしく、葉はもうスツカリ枯れた、といふよりは、朽ちかゝつたのが、一つとところに溜つて骨のやうな枝におさへられてゐるのだから、内の模様はスツカリ見られる。其の垣根の裾の方に、犬の潜る穴らしいのを見た時、突然わん〜と吠え出して、毛の長い、狎のやうに小さいのが、庭とも畑とも分らぬ荒れた空地を駈けて來た。小池の下手な口笛がヒューヒューと鳴つた。犬の聲に伴奏するやうに。

犬に吠えられながら、原始的な垣根に附いて曲ると、熱帯を思はせる風に長く伸びた棕櫚の蔭から
ぢやアと激しく水を流す音が聞えた。こゝは原始的の垣根がだいぶ密になつてゐて、内を覗かれない
けれど、棕櫚の木よりも高く桔槔かたがへの横木が斜めに動いてゐるので、井戸のあることが分る。昨夜から
井戸といふものが兎角、恐ろしい聯想を伴ふので、龍子はなんだか、ぎよツとしたが、心の慄へはそ
れにとゞまらないで、垣根の内から、

「寺島さん。……龍子さん。」と、呼ばれて、一層ぎよツとした。しかし、先方の聲も、どうやら慄へ
てゐた。

「はい、どなたです。」

自分の名を呼ばれては、答へないわけに行かないから、龍子はきツと身構へをしてかう言つ。其
のとたん、笹の枯れ葉を突き破つた、白い男の手が、にゆうと出たが、其の指には、武子が先頃まで
時折箝めてゐたのと少しも違はぬ蒲鉾形の指輪の、怪しくキラ／＼と光つてゐるのを見た。笹の枯れ
葉は、バラ／＼と一時に落ちて、垣根には大きな穴があいた。

一一

白い男の、手のにゆうと出たのは、笹の枯れ葉を落して、原始的の垣根に窓を作る爲めであつた。
其の窓の内に見えるのは、立派な藝術家の手になつた見事な塑像のやうな、若い男性の肉體美を現は
した、一布片をも纏はぬ、神々しいともいふべき姿であつた。

龍子はこの神々しい塑像の如き姿に對して、ハツと顔を赧らめつゝ、眼をそむけた。そんな弱いこ
とではいけないと、自ら心に鞭つたけれど、原始的の垣根にあいた圓る窓に再び眼を向ける勇氣はな
かつた。西洋の生活に馴れた人があんな姿で婦人を呼びかけるのは怪しからんことだと、其の無禮を
憤りたい心も、一方に浮んで來たけれど、何を言ふにも、食人々種と緯名さるゝやうな村での出來事
だ。無禮を咎めるよりも、つく／＼其の名匠の造つた塑像の如き姿が見たいものだ、この瞬しゆんに、
龍子は眩暈がするほど、頭がくら／＼となつた。

垣根の内では、桔槔の音がギイーと、人の頭を鎮靜させるやうにして、水がちやア／＼と、其の見
事な身體の肩から注がれた。龍子は稻妻のやうに、チラリとそれに眼を向けたが、いかにも釣り合ひ
のとれないゝ肉つきと骨組みとではあるけれど、足の短かいのを缺點としなければならぬのを、素早
く見て取つて、すぐ元の形に顔をそむけた。さうしていつぞや、港の雨の日に、この立派男爵母子に
初対面を遂げて、洋行の話に胸の踊る希望を繋ぎながら、家へ歸つて、納戸の電燈の下で着物を着更

へる時、腕時計と眼鏡と指輪と頭髮の物とのほかに、何一つ身に着けぬ、偽りのない姿を、大鏡に映した折りのことが、羞かしく思ひ浮べられた。あの時の自分の姿は、今見た塑像の如き男性の姿と違つて、何んだか活々としなないで荒んでゐるやうな気がした。さうして矢張り足が短かゝつた。ところが、あの母堂から贈られた細長い匣に入つてゐる細長い晴彦の寫眞！あれは、今こゝで見た實物よりも、足が長く撮れてゐる。……そんなことを考へて、龍子はまた顔を赧くした。

「ひどい嵐でしたね。でも嵐のあとといふものは、氣持ちのいゝものですよ。」

誰れに言ふともなく、大きな朗らかな聲でさう言つて、晴彦はまた二三杯つゞけて釣瓶の水を浴びた。釣瓶は籬の切れかゝつた古いもので、水は瀧のやうに漏つたけれど、其の水の清らかさ。清らかな水が、女よりも白く美しい肌を流れて、迸り落つるのをば、龍子はまた稻妻の如く、チラリと眼鏡を向けて、偷み見た。

「こちらへ、お見えになつてゐらっしゃいましたのでございますか。……ちツとも存じませんものでございますから、失禮いたしました。」と、稻村はさながら昔しの農夫が其の領主に向つたやうに、土下座もしかねないほど、両手を膝のところまで下げて、うや／＼しくお辭儀をした。娘のことで憤つてゐても、面と向へば、こんなにまでしなければならぬものと思つてゐる其の心根を、憐れに感じつ

つ、龍子は小池と顔を見合せた。

「さア、行かう。」と、小池は馬鹿々々しさうにして、當てもなく歩きかけた。

「まア入つて行きたまへ。」と、晴彦は、一面識のない青年をも、自分の邸で使つてゐる書生のやうに呼び留めようとした。

「はア。有りがたうございます。」と、稻村は、小池が何んとも答へないので、恐れ入つた様子をしてかう言つた。

龍子は、キツと容を正して、この荒れた別荘の奥を見詰めた。何かそこに、武子の手が有りがありさうに思はれて、これはなか／＼、顔を赧らめたり、羞かしがつたりしてゐる場合でない、勇ましく覺悟したのであつた。

一一一

「今年の夏は、こゝで田園生活をやらうと思つてね、試みにやつて来たんだが、いやどうも、蜘蛛の巣だらけで、……」と、晴彦は全く下僕にでも對するやうな言葉で稻村に言つて、蒼空を仰ぎながら、深呼吸を始めた。其の手のすんぐりとした指に、蒲鉾形の指輪の光るのを、龍子はもう一度確かめよ

へる時、腕時計と眼鏡と指輪と頭髮の物とのほかに、何一つ身に着けぬ、偽りのない姿を、大鏡に映した折りのことが、羞かしく思ひ浮べられた。あの時の自分の姿は、今見た塑像の如き男性の姿と違つて、何んだか活々としなないで荒んでゐるやうな氣がした。さうして矢張り足が短かゝつた。ところが、あの母堂から贈られた細長い匣に入つてゐる細長い晴彦の寫眞！あれは、今こゝで見た實物よりも、足が長く撮れてゐる。……そんなことを考へて、龍子はまた顔を赧くした。

「ひどい嵐でしたね。でも嵐のあとゝいふものは、氣持ちのいゝものですよ。」

誰れに言ふともなく、大きな朗らかな聲でさう言つて、晴彦はまた二三杯つゞけて釣瓶の水を浴びた。釣瓶は籬の切れかゝつた古いもので、水は瀧のやうに漏つたけれど、其の水の清らかさ。清らかな水が、女よりも白く美しい肌を流れて、迸り落つるのをば、龍子はまた稻妻の如く、チラリと眼鏡を向けて、偷み見た。

「こちらへ、お見えになつてゐらっしゃいましたのでございますか。……ちツとも存じませんものでございますから、失禮いたしました。」と、稻村はさながら昔しの農夫が其の領主に向つたやうに、土下座もしかねないほど、両手を膝のところまで下げて、うやくしくお辭儀をした。娘のことで憤つてゐても、面と向へば、こんなにまでしなければならぬものと思つてゐる其の心根を、憐れに感じつ

つ、龍子は小池と顔を見合せた。

「さア、行かう。」と、小池は馬鹿々々しさうにして、當てもなく歩きかけた。

「まア入つて行きたまへ。」と、晴彦は、一面識のない青年をも、自分の邸で使つてゐる書生のやうに呼び留めようとした。

「はア。有りがたうございます。」と、稻村は、小池が何んとも答へないので、恐れ入つた様子をしてかう言つた。

龍子は、キツと容を正して、この荒れた別荘の奥を見詰めた。何かそこに、武子の手がよりがありさうに思はれて、これはなかく、顔を赧らめたり、羞かしがつたりしてゐる場合でないと、勇ましく覺悟したのであつた。

一一一

「今年の夏は、こゝで田園生活をやらうと思つてね、試みにやつて来たんだが、いやどうも、蜘蛛の巣だらけで、……」と、晴彦は全く下僕にでも對するやうな言葉で稻村に言つて、蒼空を仰ぎながら、深呼吸を始めた。其の手のすんぐりとした指に、蒲鉾形の指輪の光るのを、龍子はもう一度確かめよ

うとしたが、いつの間にか抜き取つてしまつたと見えて、もうなかつた。却つて自分の眼を疑ふ氣持ちになつて、龍子はたゞいらくするばかりであつた。姉が時折り箝めてゐたのと少しも違はぬ指輪を、この青年の冷水に濡れた指に見たのは、自分の幻影であつたのか。先刻の鶏舎の上の片足の草履と言ひ、こゝでの指輪と言ひ、自分の心が、いろ／＼の小さな品物で驚ろかされることよ。……

「こちらで、よくお泊りになれましてごさいますね。」と、稲村は不審さうに眉を擧めながら、そこから三間ばかり離れて腐りかゝつてゐる冠木門かぶきかどを入らうとした。

「なアに、昨夜は、その高山で泊つたんだよ。……今朝早くこつちへ來たんだ。」と、晴彦の變に咽喉へ引ツかゝるやうな聲を聞いた時、龍子はドキンと胸の轟ろくのを覺えた。あの騒ぎの起つてゐる高山の家へ無事に泊つて、今朝平穩にこゝへ來てゐられるわけがない。どうしてそんな嘘を言ふかと、怪しまないではゐられなかつた。

「高山さんへ？」と、稲村も、いよ／＼眉を擧めたが、それは井戸端の晴彦に聞えもしなければ、見えもしなかつた。

「僕はいやだ。こんな、特權階級の悪臭のするところへ入らない。」

かう言つて、小池は駄々を捏ねるやうに、龍子が入つてみませう、と目配せをしたのに答へた。

「いゝえ、何も臭ひはしやしません。」と、稲村が背後を振りかへつて、農夫出身にしてはツンと高い鼻をひこつかせたので、龍子も小池も笑つてしまつた。

「何か手がゝりがあるかも知れないから、おいやでせうが、入つて頂戴！」と、龍子は少し甘えるやうに言つた。さうして三人がぞろ／＼入つて行くと、晴彦は深呼吸を止めて、タオルで頻りに皮膚を擦つてゐた。稲村はそれに近付いて、またうや／＼しくお辭儀をしてから、何か小聲で話してゐた。

門を入つたところに、大きな柿の木があつて、それからすうツと、兩側に茶の木が、伸び放題に形を崩して、十株ほど、人間の腰ぐらゐまでの高さに並んでゐた。茅葺きの家はだいぶ奥にあつて、二人の男女が忙しさに大掃除をしてゐるらしかつた。いつ手入れをしたのか、黒く煤けた中に混つて、白く新しい材木を用ゐた痕が著しく目に立つた。

「君ツ、喉を早く歸してくれなくツちや、手不足で困つてるんだよ、横濱の方ぢや。」と、晴彦が大きな聲で言つてゐるのを聞いて、龍子はまた小池と顔を見合はした。何か少し、針でもチク／＼刺すやうなことを言つてやればいゝのにと、龍子は稲村の餘りな意氣地なさが齒痒かつた。

それから、晴彦は、其のままの姿で、大手を振つて、こつちへ歩いて來るので、龍子はお喉の洋傘で顔を隠して立ち竦んでゐた。もう大抵よからうと思つて、あつちを見ると、新らしい籐の脇掛椅子

を地べたへ据えて、それにドツカと、何も纏はぬ腰をおろした晴彦は、お咲によく似た可愛らしい小間使に、ぼた／＼と雫の落ちる濃い頭髪を、タオルで拭かしてゐた。

一三

『あんなに裸體でゐて、寒くないんでせうか。』と、稲村は小聲で囁くやうに、龍子の顔へ近く顔を寄せていつた。皮の硬さうな農夫出身の澁紙色をした顔が、かう近くへ來ては、深く刻まれた皺までが、顕微鏡で擴大されたやうに恐ろしく見えて、龍子は覺えず二三歩後退りをした。離れて見てゐれば、矢張り優しさうな田舎家主さんであつた。

『あの逞ましい身體を見せたいんだよ。運動と冷水浴とで鍛へた鐵のやうな筋肉を見てくれ、といふところだ。龍子さん、もツと近くへ行つて、よく見てやりたまへ。』と、小池は不愉快さうな様子をして、唾液を吐き／＼言つた。

『寒の中でも、あゝやつて水をお浴びになるんださうですがね。小間使に赤くなるまで、胸から腹から背中から足まで、乾いたタオルで擦らせるんださうでございましたね、お咲もそれが死ぬほど厭やだと言つて居りました。』と、稲村はじつと伏せ目に地べたを見つめて、しみ／＼と涙のこぼれさうな

聲で囁いた。

『おい／＼、君たちそんなところで、内證話なんぞしてゐないで、こつちへやつて來たまへ。』と、朗らかな聲で言つて、晴彦はあの姿のまゝで、椅子から立つと、自慢の筋肉を働らかして、腕を振つたり足を挙げたり、いろ／＼の體操や運動小技の眞似をして見せた。

『あいつは猿だね。』と、小池は先方の耳へ聞えるほどの聲で言つて苦笑した。身に一布片をも纏はぬ姿で、幾ら立派な見事な、名高い藝術家の手に成つた塑像のやうな體格を誇るにしても、婦人を前にして、あのさまは何んといふことだと、龍子も腹立たしくなつた。

漸く猿のやうな動作から鎮まつた晴彦は、姿をそのまゝに、小間使の捧ぐる柄の長い手鏡を受け取つて、顔や頭髪を自分ながら惚々とする風で映して見てゐた。眞ツ黒に美しく光る其の髪は、小間使の手で、綺麗に櫛目を入れられてあつた。

『僕は商人です。貴族の待遇は御免蒙りますよ。』と、曾つて言つてゐたのを、見事に裏切つて、今日は華族の若さまらしい我儘振りと、尊大さを十分に見せ付けてゐる晴彦は、まだそれで足りないのか、人前をも憚からず、突然傍に侍つてゐた小間使の手をとつて、地べたで舞踏の眞似事を始めようとした。

『あらッ、いけません。……御免あそばして。』と、キイ／＼聲を立て、白い蛇の如く絡まりかゝる晴彦の手を振り拂ひつゝ、櫛とタオルとを持つて逃げて行く矢舁の後姿を、稻村は恨として見詰めてゐた。自分の娘も、一再ならずあんな目に遭つた末、あゝいふことに立ち至つたのであらうと考へてゐるらしく、龍子は稻村に注ぐ深い同情と、晴彦に對する憎惡とに、ブル／＼と身體を慄はした。

『馬鹿々々しい。……さア行かうぢやないか。』と、小池が更に憤慨の語勢を強めて、冠木門の方へ行きかゝるのを、龍子は周章て、引き留めつゝ、『後生ですから、もう少し居て頂戴！』と、力の籠つた聲で囁いた。

『猿芝居の餘興なんか見たくないや。』と、小池は大きな聲で言つて、ブン／＼怒りながら、漸く立ち止まつた。龍子は晴彦があゝの蒲鉾形の指輪をどこへ隠したのかと、不思議に打たれて、何一つ隠し所を持たぬ晴彦の姿を、ちよい／＼偷み見してゐた。

宮さまの御殿で、もなければ、今は滅多に見られぬ矢舁は、昨夜お咲も着てゐたが、あれと同じやうなのを着た可憐な少女は、今の惡戯を怒ることも出来ないで、うやく／＼しく、晴彦の身に着けるものを捧げつゝ、また現はれた。晴彦は手早く、輕快な背廣姿になつた。

一四

小間使の捧ぐる新らしい麥稈帽子を取つて、斜めに被つた晴彦は、瀟洒たる青年紳士に成りすまして革紐の附いた、黄金の飾りの光る、細身のステツキを、同じく小間使の白い手から受け取ると、廣い慶園の中をば、あちこちと歩き廻つた。背が低くて、身體つきのすんぐりしてゐるといふ憾みはあるけれど、さうした缺點は、洋服の着こなして補うて、手を擧げるにも、足を運ぶにも、一つ／＼西洋仕込みの上品な、氣の利いたところが現はれて、覺えず龍子をうツとりとさせた。先刻から傍若無人な振る舞ひに對する、憎惡の心を忘れたのでないけれど。

『矢張り貴族は貴族だ！』……といふやうなことを考へないではゐられなかつた。あの上品な氣の利いた風采に對して、この荒れた別荘の粗末さが氣の毒でならない、とも龍子は考へた。港の雨の日に初め一逢つた時は、たゞの青年紳士で、成るほど貴公子然としたところはあつたけれど、さほど上品にも見えなかつたし、こんなに氣が利いた人とも感じられなかつたのに、矢張りこの荒れた別荘がこの人を引き立たせるのであらうとも思つて、龍子は再びうツとりとなつた。

『行かうや、詰まらないところに、いつまで居るんだ。……あなたがまだぐづ／＼してゐるんなら、

僕は一人で先きに歸る。』と、小池はいら／＼して言つた。

『もう少し！……お姉さまの手が／＼りを、きつとこゝで得られると思ふから。……ね、いゝでせう、もう暫らく。』と、龍子は聲を密めて、嘆願するやうに言つた。

『武子さんの手が／＼りよりも、あの巴里パリツ兒の若い模型が、もつと見て居たいんだらう。……一緒に洋行するがいゝや。』と、小池は今までと打つて變つた低い聲で泣き出しさうに言つた。すぐこんな風に僻んで、女の腐つたやうなことを言ふ小池の弱さを憐れみ且つ憤りつゝ、龍子は、

『あいつは猿だ、と言つてみたり、また巴里ツ兒になつたり、どツちがほんとなの？』と調弄つた。小池は全く怒つてしまつて、『どうでも勝手にしたまへツ。……僕は歸る。』と、すつかり顔の色を變へた。

『お歸りなさい！』と、龍子はキツバリ言ひ放つて、茅葺きの家の方に進まうとした。家を一回はりして來たらしい晴彦は、新しい麥稈帽子の下に、にこやかな、人を惹つけるやうな顔を、くつきりと、初夏の爽やかな大氣の中に浮べて見せてゐた。

『もう少し、こゝにおいでになつたら、よろしいでございませう。……今に何か出てまゐりますよ。』と、稻村は仲間いざに諍ひの起つたのに當惑する風で、眉を擧めながら言つた。

『いゝえ、僕は行きます。こんなところに、もう一分間も居るのはいやです。華族と油蟲は、嫌ひなんです。』と、早口に言ひ棄て、べつ／＼と唾液を吐きつゝ、冠へ門に突き當つて、腐りかゝつた柱を、へし折りはしないかと思はるゝほど、劇しく揺かして、小池は出て行つた。一度ぐらゐは振りかへりさうなものだと、龍子は瞬きもしないで見送つたが、何んの未練氣もなさうな様子を、無理から背中に現はさうとする風で、小池の姿は原始的な垣根の外を、青葉の中へ、融け込むやうに消えた。『行つてしまひました。』

龍子は、今更ら淋しさうにして、稻村にかう言つた。稻村は心ひそかに、龍子の勝氣に驚ろいてゐるらしく、また親しみもないこの若く美しいお嬢さんと、二人切りになつたのに困つてしまつたといふ顔をした。

晴彦の柔らかい手招ぎに、吸ひ寄せられるやうなあんばいで、龍子は瀟洒たる背廣姿に近づいて行つた。

一五

茅葺きの家は、稻村の言つたほど荒れてもゐなかつた。もつとも近頃手入れをしたらしい形跡が、

近づくほど目に立つて、黒ずんだ中に、ちよい／＼白い板などが混つてゐるのである。縁側の外のガラス戸はいつ入れたのか、これも新らしいには新らしいが、極く新らしくもなかつた。座敷の障子にす／＼付付けて雨戸を閉てるやうにした家を、龍子は、今初めて見た。縁側は雨戸の外にあるのだ。其の縁側の外へガラス戸を箝めたからよいやうなもの、何んだか變な工合に見える。

『この姥ヶ谷は、昔しからこれでございまして、縁側は雨風に晒しツ放しなんでございまして。』と、稲村は龍子に言つて、それから晴彦に、『ちツとも存じませんが、餘ほどお手入れをなさいますしてございませう。』と、お泊りになられますでございませう。』と、またうやく／＼しく、小腰をかどめた。

『あゝア。』と、晴彦はおほやうに頷いて、『齋木に任せツきりだ。どうだツて構はん、寝られさへすれやいゝんだからね。』と、矢張り下僕に對するやうな言葉を改めなかつた。

『これなら、結構お息みになれますでございまして。』と、稲村は眼を鋭くして、ジツト家の内を覗き込んだ。四室か五室の家で、横の方に入口があつて、昔しは何々講の木札とか、荒神さまのお守護とかを貼つてあつたらしい幅の厚い古ぼけた鴨居の下には、高い敷居が、長年重い戸に摺り減らされて、深くなつた溝で、怨めしさうに鴨居を覗んで居る。それを跨ぐと、廣い土間があつて、奥には薄暗く

土籠が大小七つの口を並べてゐようといふ農家の作り其のまゝの中に、座敷だけは、靜物の油畫などをかけて、籐製の小卓子を真ん中に、先刻晴彦が裸體で腰をおろしたのと同、籐製の眩掛け椅子が、三四脚置いてある。

『この裏手に、庭球コートを押へようと思ふんだがね。』と、晴彦はステツキでさし示しつゝ稲村に言つてから、龍子の方を向いて、『この前の廣場に野外劇を演れるくらの設備をしようといひます。出來上つたらあなたも何か一と役引受けて下さい。みんな素人ですよ、女優さんがなくて困つてゐます。……この下の方に池がありますからね、あすこで水泳をやつて、裏で庭球をやつて、こゝで劇を演らうといふ計畫です。この夏は運動と藝術とに送らうといふんです。ちよい／＼で下さい。……この家を舞臺に取り込んで、縁側を使ふ脚本を、一つ書いてくれませんか。何か神秘的なものがいいです。ね。この家には、開けずの厠といふのがあつて、便所の戸が釘付けにしてあります。あれを材料の基礎にして、怪談……も古臭いが、……何かう表現派がゝつたものでも出來ませんか。……水泳と庭球と劇ですな。……あなた泳げますか、泳げるんなら一緒に泳ぎませう。』と、のべつにべら／＼喋舌つて、ステツキを振り廻してゐた。

『わたくし、何も出來ません。』と、龍子はツンとして、何か秘密のなくてはならぬ茅葺きの家の奥の

方を覗かうとした。セツセと大掃除に働らいてゐた男女は、皆な見えなくなつて、かけてある物の油繪が、骸骨を描いたものゝやうに見えて來た。

「嘘仰ツしやい。何んでもお出來になることは、いつだつたか、新聞で見ましたよ。……あの先刻、僕のことを巴里^{パリ}ツ兒^{ツイ}だと言つた人、あれ、あなたの友だちでせう。どこへ行きました。……僕は巴里ツ兒ぢやありませんよ。寧ろヂイブシイの……」と言ひかけて、晴彦は俄かに口を噤んだ。顔の色もたしかに變りかけたやうであつた。やがて彼れは運動で鍛へた強さうな腕を振つて、無意味に「あははは」と、高く笑つた。

一六

「おい、君ツ、喉を早く歸してくれたまへ。みんな怖がつてしやうがないんだから。」と、晴彦はまた稲村の方を向いて、頭ごなしにやつ付けるやうな物の言ひかたをした。

「身體がわるいとか申して居りましたが、事によりますと、おしまをいたゞかなげやならないかも知れないと存じまして。」と、稲村は、恐るゝ申し上ぐるといふ風ながら、其の眼光は鋭く、晴彦の圓く柔らかさうな顔を射た。横濱で見た時よりは、また少し濃くなつたと思はるゝ頬髯を刺つた痕が青々

として晴彦の横顔をば、じつと睨みながら、龍子は自分の揉み上げのところを撫でたりして、横手に立つてゐた。

「なに、ひまをくれ。……」

晴彦はぎよツとした様子で、遙かに野外劇を演ると言つた廣場の先きの方を見詰めつゝ、ニヤリと苦笑ひして、「女中は母さまの管轄だから、僕は知らんが、しかし、臆病者ばかり揃つてる中で、咲子女史……ミスサキが、唯だ一人の勇者だから、この夏を僕とゝもに、こゝで林間生活をしようといふのは彼女のほかにないよ、あのヂイブシイの女に行かれツちまツちや……」と、いろゝのことをば、一時をごまかすやうな調子で、ペラ／＼やりかけて、一方にまた龍子を憚かるらしく、急に言葉を切つてしまつた。

「いづれ、本人によく申し聞けまして、大奥さまにお願いいたしたいと存じて居ります。」と、稲村は、真綿に針を包んだやうなことを言つた。矢ツ張りさう、恐れ入つてばかりゐるのでもないと思つて、龍子は幾らか心強くなつた。

「龍子さん、裏の方へ行つてみませう。」と、晴彦は氣を變へた風で、龍子を誘ひつゝ、ステツキを振り振り、靜かに歩き出した。龍子はこの男と二人切りになるのが、些か心細かつたけれど、虎穴に入

らすんば何んとやら、といふ言葉を思ひ出して、其の後から蹠いて行つた。稻村は不安さうな顔をして、獨り残つた。

茅葺きの家の裏手には、トタン張りの屋根をした、修繕用の材木の置場所が出来てゐた。其の先きは緩い傾斜地になつて、栗木が四五本繁つてゐる。

『いやな蟲が落ちますよ、今に傘を翳さなげや、この栗の木の下は歩けないんです。』と言はれて、大都會の真ん中に育つた龍子は、首が冷やりと縮まりさうに感じた。栗林を抜けると、可なり広い空地があつて、三方を青葉の森に包まれ南の一方に、姥ヶ谷の今通つて来たあたりを見おろし、すぐ下には蒼い水を湛へた池があつた。いかにも庭球コート造るのに好さうなところだが、まだ何んの準備にもかゝらないで、荒れたまゝに、四阿あづまが傾れかゝつて残つてゐた。いかにも、人里遠く離れたといふ感じのするところであつた。

新らしく持つて来たのか、或ひはもとからあるのか、もとからあつたにしては、空家になつてゐるうちによく盗まれなかつたものだと思はるゝ、支那焼きの見事な榻の上に腰をおろした晴彦は、今までと打つて變つた嚴めしい様子を見せて、

「龍子さん、あなたはどうしてこんなところへ来たんですか。」と、問ひかけた。

『散歩にまゐりましたの！』と、龍子は四邊に眼を配りながら、油断せず答へた。空はまた曇りかかつて、高い木の梢と黒い雲とが、日除けを勤めてくれるから、龍子は借り物の長い柄の洋傘を窄めて、武器の如くに構へてゐた。其の流行おくれの洋傘と、小池の老母から借りた黒い鼻緒の駒下駄とを、うさんくさうに見詰めてから、

「嘘仰ツしやい。何か目的があつて来たんでせう。」と、晴彦は恐ろし氣な眼をした。

一七

『目的？目的なんぞ、何もございません。』と何氣なく言ふつもりでも、龍子の聲は慄へを帯びた。

『さうですか、それならまアそれでいゝとして、あなた、洋行の問題をどうしました、母が、それに就いて手紙を差し上げたのにお返事を下さらない、と言つて怒つてますよ。』と言ひ、晴彦は龍子が動もすれば隠すやうにして、洋傘に持ち添へてゐる白い手巾の包みに、じろく／＼と眼を向けた、それはどうも、一見して、草履が片方包んであると分りさうであつた。

『お手紙？』と龍子は首を傾けて、『お手紙は一度もいたゞきません。』と、いぶかしさうに言つた。

『いゝえ、たしかに手紙を差し上げたさうですよ。今にこゝへ來ませうから、直接話してごらんなさ

い。どうも日本の淑女は禮儀を知らない、と言つてました。」と、晴彦はむづかしい顔をして、相變らず龍子の手元に眼を注いだ。

『まア。』と、龍子は呆れた顔をしたが、しかし、今はそんなことを争つてゐる場合でないと考へた。さうして一つ思ひきつて、武子のことを話してみようか。……話さずに様子を探るのがよいか、話して顔色を窺ふのがよいか。この二つの手段をば、いづれとも擇びかねて、龍子はぐづ／＼してゐるのであつた。

第一、武子が行方知れずになつたこと、晴彦がこゝへ來てゐることゝに、關係があるか、ないか。あの豚小屋のやうな鶏商人の家を中心とした姥ヶ谷の部落と、立松家のこの別荘とに、聯絡があるかないか。それを確めなければならぬのだが、偕てどうすればよいか。

それを考へて、龍子がいろ／＼と苦心してゐるのを、晴彦は薄氣味わるくも感じないのか、いやにニコ／＼した顔になつて、

「お姉さまは、どうしました。」と、きはめて平氣で問ひかけた。龍子は些かどきまぎして、この人はづう／＼しい人だと呆れながら、答へる言葉に苦しんだ。落ちついてこんなことが言へるからには、この人と武子の行方とには、關係がないのかも知れないと思ひかけたが、わざと白ばくれて見せるのか

も、知れないと考へなほして、龍子は全く迷つてしまつた。

「武子さんの結婚には失敗したが、僕改めて、あなたに御交際が願ひたいと思ふんです。……いや決して、あなたをどうしようといふやうな、そんな、……そんな卑劣な考へからぢやありません。それやね、男と女とですもの、互ひに相理解すれば、結婚といふ點に落ちつくのは、きはめて自然でせう。しかし、それは、後の事です。そんなことは、全然豫想の中に入れておかないで、もう少し深く御交際を願ひたいんですがア。母の差し上げた手紙にも、そんなことが書いてあつたんでせう、多分ね。……彼女が僕の心の底を最も深く探つて同情を注いでくれる點に於いては、今のところ第一人者の地位にあるのです。あなたが僕と親密に交際して下さつたら、この地位は多分、母からあなたに譲るでせうがね。」と、晴彦は巧みな言葉を滑らかな舌に載せて、人を酔はすやうな調子を出した。流石は名高い外交家の息子だけはあると感心する前に、龍子はます／＼其のづう／＼しさに呆れた。いよ／＼本音を吹き出したな、とも考へないではゐられなかつた。

しかし、この場合、一言の下にこれを斥けては、折角こゝまで探檢に來た甲斐がなくなると思ひなほして、うまくこの男を操らうとする危い藝當を工夫しつゝ、龍子は先づ、晴彦の隣の榻の上へ靜かに腰をおろした。

『それでね、僕はあなたと友人になつて、……親友になつて、二人で旅行をしたいと思ふのです。旅行も日本の内地は、つまりませんから、外國へ行くんですね。これは別に新しい問題ぢやありません、あなたに取つちや、あの洋行の話の繼續です。母はともに行かないさうですから、一人で行くよりは、僕とでも二人で行く方が、あなたは心強いせう。わたしも、淋しくなつていゝから。……あなたにはイタリアが御希望ですね、僕は先づパリへ行くつもりです。親爺の友だちが、始終手紙をよこして、是非来いと言ひますから、横濱からアメリカ經由で、パリまで一緒に行かうぢやありませんか。この夏をこの山寨で、運動と旅行準備とに送つて、秋に出かけるんですね。イタリアの秋はいいですよ。……あなた失禮ですが、會話はお出来になりますか。なんならこゝで運動や演劇をやりながら、英語とフレンチの練習をしませう。母も来ませうから。彼女も毛唐との話はなかくうまいですよ。』と、晴彦は蟲のよさうなことばかり、獨りで調子よく喋舌つた。

『わたくし、何も出来ませんの。いづれ教へていたゞかなければならないと存じます。』と、龍子は先づこれ位ゐに調子を合しておいて、何ものかを探り出さうと苦心した。

『僕はね、子供の時、親爺に方々の國へ引ツ張つて歩かれたものだから、ずるぶん各國の言葉に通じてたんですが、今は大概忘れツちまつて、英佛だけです。ロシア語も、七歳ぐらゐの時はよく喋舌つたさうですが、他の國へ行つたものだから、十歳ぐらゐの時はもう馬といふロシア語を一つ知つてただけです。馬が好きなものですから、……あなたどうです、馬は乗れますか。今に栗毛のやつを一つ頭こゝへ連れて来るつもりです、あなたが乗れるんなら、もう一頭どうかしますよ。ごくおとなしいのをね。二人で轡を並べて、この邊の森の中や丘の上を乗り廻はさうぢやありませんか。……』

どうやら、狐を馬に乗せたやうな晴彦の話を聞きながら、龍子は姉の行方に晴彦が關係してゐるかどうか、そればかりを考へてゐた。

『それぢや、承諾して下すつたんですね。』と、晴彦は確かに念を押すやうに言つた。

『何をでございます。』と、龍子は眉を擧げた。

『僕と親友になることを。』

『えゝ。』と言つてしまつてから、龍子はこれが恐ろしい禍ひの根になりさうな豫感に襲はれたが、何事も姉の爲めだと思つて、ジツと堪へた。

『それぢや、親友として、明日あたり、あなたのお宅へ第一回の訪問をしますよ。』と、晴彦はさもさ

も満足氣な顔をした。

『どうぞ入らして下さいませ。……ですけど、只今病人がありまして、少々取り込んで居りますが。』と、龍子は烏賊が墨汁を吐くやうに言葉を濁した。

『御病人？ どなた。……阿母さん？ 武子さん？ 妹さん？……』と、晴彦は急き込んで問うた。其の時、若々しい母堂の聲が、下の栗林の方に聞えて、

『あゝ、そこですか、晴さんは。ずぶん探したのよ。……あらお珍らしい、龍子さん！』と言ひながら、のツし〜と、肥つた身體で、傾斜地を登つて來た。其の後には、青木が、スツカリ前歯を新らしく入れても、反ツ齒を抜かぬ前の癖で、まだ口先を尖らしつゝ、ニコ〜として隨いて來た。

『青木さん、丁度好かつたわね、龍子さんに意外なところでお目にかゝれて。』と、母堂はいやに甘ツたるい物の言ひやうをした。其の調子が、どうも、料理屋のおかみさんと言つたやうな工合に劇變してゐるのを感じつゝ、龍子は折角の探檢がこの人々によつて、めちやく〜にされるのを憂へた。

屋上の亂舞

姥ヶ谷の探檢は、全く失敗に終つたとも言へないけれど、武子の行方を突きとめることは出来なかつた。たゞあんな面妖な部落が、今の世に都の近くで巢ぐつてゐるのを奇怪としなければならなかつた。

面妖だとか奇怪だとか言つてみても、たゞ散歩に通つたゞけでは、何んの變つたところが見えるわけでもない。東京近郊の特色として、市街地を少し離れると、一足飛びに、時代が何百年も後戻りしたやうな武藏野の野趣を生じて、里も家も人も、全く都會の感化を受けてゐない朴訥さを現はすのであるが、姥ヶ谷では殊にそれがひどくて、どこかの蕃地へでも入つたといふほどの文化ばなれした風俗が見られたり、人情、親はれたりする。里の道をちよつと素通りしてさへそれだから、一軒々々、あの豚小屋のやうな家へ入つて見たら、どんなことがあるかも知れないと、ぶる〜身體が慄へるばかりであつた。もちろんそれは、初めに小池の老母や稻村にはいろ〜の話を開 されてゐたのと。

いつも都會のまん中に生活して、こんな田舎へ出なかつたといふことが、よけいに龍子の心を刺戟したのでもあらうけれど、兎に角恐ろしいところ、何か祕密のありさうな部落として、血腥いやうな印象をとどめつゝ、小池の家まで引きあげたのであつた。

其の面妖な土地の丘の上に、部落の一部を見下ろして、別荘を營んだ立松家の先代は、全く鴨獵が目的であつたのだらうが、當主の晴彦や母堂が、湯河原や輕井澤にも別荘があるといふのに、わざ／＼この姥ヶ谷の廢屋に手入れをして、この夏をそこに送らうとするのも面妖な話である。……姥ヶ谷と立松晴彦……其の間に何かの引ツかゝりがなくてはならぬ。

氣味のわるい姥ヶ谷の昔の火葬場を見て、古い人間の白骨と、新しいフェルトの草履とが、藪の中から出て來たのに、龍子はいよ／＼恐れを抱いたが、立松の別荘からの歸りに、丁度火葬場の後になつてゐる土葬場……と言ふのも變だが、單に墓地とも言つてしまひたくない赤土の穴を、凄い顔をした人たちが頻りに掘つてゐた。あの鶏商人の女房の遺骸を埋める爲めだと、稻村は言つたが、龍子は何んとなくあの穴へ埋めらるゝものが、武子の遺骸だといふ氣がしてならなかつた。穴が浅いからこゝの墓場では、大雨が降ると、土が流されて、お棺が露はれたりひどい時は、死骸の頭が見えたりする。などといふことを、稻村のしんみりとした調子で話さして、龍子はいよ／＼心を暗くした。行

く時には三人であつたのに、歸りは二人に減つてゐるのも、心細さを感じさせられた。

晴彦の胤を宿してゐるといふ哀はれなお喉の身の振りかたに就いて、少し話してみたいと思つたけれど、どうも言ひにくくて、龍子は沈黙のまゝ、矢張り沈黙の稻村の後から、とぼ／＼と歩いてゐたのであつたが、途中で稻村が、龍子の持つてゐる二つの證據品——血染めの半巾とフェルト草履の片方と——を持つて、もう一度警察署へ行つてくれるといふことで、道祖神の石標のところまで別れたから、一人になつてしまつた龍子はいよ／＼心細さに胸を押さへつゝ漸く小池の家まで辿り着くと、小池がさして不機嫌な顔もせず、玄關へ迎へてくれたのが、先づ嬉しかつた。

ゆる／＼老母と話してゐる暇もなく、小池に送られて、堀留の家へ歸つたが、電車の中から見る東京の街々が、龍子にはすゐぶん久し振りのやうな氣がしてならないのであつた。空はまた曇つて、夕景近くの裏町は、蝙蝠でも飛びさうであつた。

自宅の格子戸を開けると、羊子が先づ飛び出して來て、『姉さん！』と泣き聲を絞つた。

二

母親はすや／＼と、よく眠つてゐた。口元はまだ赤く、赤インキを呑んだ痕に染まつてゐたが、平

生の通り平和な顔に見えた。丸髷をほぐして、ぐる／＼巻きにした拙なさは羊子の手際だと思はれた。

『何か召し上つたの？』と、龍子は羊子を顧りみた。

『え、ずいぶんドツサリ。あんなに食べて毒ぢやないでせうか。』と、羊子は呆れたやうに、また感心した風に言つた。背後でお鶴が泣き笑ひといふ顔をして、前懸けで口を押さへてゐた。

『消化のいゝものでなければと思つたんですが、パンもお粥もお嫌ひでせう。それでね、おさしみで普通の御飯を三膳、それからお鮓が食べたいと言つて、にぎりを七つ、カステラが欲しいと言つて、……』と、羊子が早口に並べ立てるのを、龍子は手を振つて制した。羊子はそれに屈せず、

『お隣家の小父さんに毒をいたゞいたので差し上げると、赤いものはいやだと言つて召し上らないの、インキを思ひ出したのね、きつと。』と、痛まし氣な顔をした。

『それでも、まアよかつた。羊子ちゃんがわたしの顔を見るなり、泣き聲を出しておどかすもんだから、阿母さんがまたどうかなすつたのかと思つて、胸がドキ／＼した。』と、龍子はホツとした氣持ちになつたが、もと／＼病身なところへ、昨夜からの疲れが出て、動もすれば昏倒しさうになるのを、持ち前の勝氣一つで、支へてゐるのであつた。

『大きい姉さんは、どうなすつたの？』と、羊子は俄かにまた泣き聲を出して、急き込む風に問ひかけた。龍子は伏し目になつて、何んとも答へることが出来なかつたが、其の眼には涙がいつぱいになつた。

『わたし、それが一番先きに、お訊きしたかつただけど、何んだか胸がいつぱいになつて言へなかつたの！ 姉さん、大きい姉さんは死んでおしまひになつたんぢやないんですの？……だつて、昨夜、わたしも阿母さんも、同じ夢を見たんですもの。大きい姉さんが血まみれになつて……』と言ひかけて、羊子はわつと泣き伏した。其の聲に、病める母親の夢は破れて、どんよりと力のない眼を見開いた。『これ羊子さん、静かに。』と、龍子は妹を叱つたが、もう間に合はなかつた。

『あゝツ武ちゃんか。』と、叫ぶと／＼もに、母親はむツくり起き上つて、いきなり龍子に抱き付いて來た。『よくまア、無事に歸つておくれただね。ほんとに、わたしもう、生きて現世で武ちゃんに逢はれないかと思つたよ。……』

かう言つて、赤インキの痕の消えない口元を、龍子の頬に摺り付けるのであつた。

『阿母さん、違ひます。大きい姉さんぢやありません。それは、小さい姉さんです。』と、羊子は涙に光る眼で、母親の狂態を見詰めつゝ、おろ／＼聲で騒ぎ立てた。龍子はじつと、母親のなすがまゝに

任せて、其の鎮靜するのを待つたが、心の中の苦しさは、腸を掻きむしらるゝやうであつた。

『ほんとにね、總領に生れながら、みんなに馬鹿にされたり、嘲弄はれたりして、お前は不運な娘だよ。でもまあ、ほんとによく生きてゐておくれただね。いくら馬鹿にされたつて、お前は總領だものね、こゝの家の相續はお前がするんだよ、男の子がないんだもの。あんな立松なんて、人でなしは思ひ切つておしまひ。華族だつて、何んだつて義理人情を知らないやつは、人間ぢやない。今にわたしがいゝお掣さんを見立てるからね、こゝの家の相續は、誰れが何んと言つても、お前がするんだよ。わたしはもうお前の身體に若しものがあつたら、生きてゐないつもりだつた。……』と、一心にかじり付いて掻き口説く母親の熱い涙が、龍子の頬に傳ふた。

三

『あゝッ。』と、母親は一聲高く叫ぶとゝもに、龍子をば強く突き放して、其の反動で、自身もドリと床の上に倒れた。

『阿母さん、どうなさいました。』と、龍子がかよわい自身の身體に防禦の姿勢をとることをも忘れて後へ轉ばされたまゝ、さう言つた。

『何が阿母さんだ。この不孝者……義理知らず。……』と、血を吐くやうな聲で叫んだ母親は、起きかへりさま、枕元に有り合はした湯呑を取るなり、龍子の美しい顔を目がけて投げ付けた。

『あゝア、口惜しい。武子が歸つたのだとばかり思つて、あんなにしたが何んだか冷たいやうな気がするから、よく見ると、義理知らずだ。龍子だ。』と、母親は眼の色を變へ、口を大きく開いて頻りに身を悶えた。口の中はまだインキの色が抜けないのでもあるまいが、異常に赤く見えた。

眞ツ向に飛んで來た湯呑を、少し横へ避けたので肩へあたつて、茶か水か知らず、だら／＼と流れて衽まで濡らした。

『阿母さん、小さい姉さんを、どうしてそんなになさるの。』

たゞもう驚ろいてしまつて、はらく／＼しながら、何も言ふことが出來ないで見てゐた羊子は、この時漸くかう言つて、涙とゝもに、横合ひから母親に取り縋つた。

『羊ちゃん。』と、母親は俄かに優しい顔をして、とろけるやうな眼で羊子を見詰めつゝ、『お前は何も知らないんだよ。これはね。』と、邪慳な手つきで、龍子を指さして、『わるいやつだよ。』と、さも憎さげに言つた。

龍子はどう考へてみても、一晚のうちに、母親の感情が自分に對してこんなに悪くなつたのか、ま

るで解らなかつた。醫者は、精神の激動から來た一時的の發作だと、何んでもないやうに言つたけれど、素人目にはどうも、母親の心が狂つてゐる。正氣でない。さうして病勢が可なり根深く進んでゐる。……と思はれて、一層の憂はしさに胸を抱いた。

「武ちやんをひどい目に遭はしたのは、皆この女なのだ。表向きは優しさうに、親切さうに見せかけて、裏へ廻つて妨害するんだからね。妨害ばかりぢやない、横取りをするんだ。羊ちやん、お前もねこんな女を姉さんと思つて、姉さん姉さんと言つてると、今にどんな目に遇はされるか知れないよ。」

いくら氣が狂つてゐるとは言へ母親の口からこんなことを聞かされては、流石に龍子も平然としてゐられなかつたけれども、今この母親に何を言つたとて、どう辯解したとて、更らにそれを激させて、病勢を高ぶらせるばかりであらうと思ひつゝ、ジツと齒をくひしばつて、差し俯向いてゐた。昨夜から今日へかけて、一夜一日、風に吹かれ雨に濡れ、日に晒されてひたすらに姉の行方をば、殆んど生命がけで探し求めてゐるうちに家の方では、病める母親の感情が、スツカリ自分を惡者にしてしまつてゐる。どうしてこんなことになつたか。單に病氣の故とばかりも考へられない。

羊子は母親の枕許から、姉の側へにじり寄つて『姉さん。』と、龍子の膝に泣きくづれた。

「羊子、羊ちやん。これ、そんな悪い女の側へ寄るんぢやない。白い綺麗な顔をしてゐても、お腹の

中は眞ツ黒だ。毒がある、毒がある。』と、母親は長く手を伸ばして、羊子をば龍子から引き離さうとした。

「姉さん。……」と泣き叫んで、羊子は身を慄はしつゝ、龍子の膝にしがみ付いてゐた。

四

「さア羊ちやん、もう星が出たらう。物干へ上りませう。鶴やにさう言つておくれ。』と、母親は急に何か重大なことでも思ひ出したやうに、せか／＼して、今にも立ち上りさうな勢ひを見せた。

「でも、阿母さん。』と、羊子がおろ／＼聲で、困り切つた哀はれさ。

「羊ちやん、何んですの？』と、龍子は首を傾けた。星が出たらう、物干へ上りませうのと、さツぱりわけがわからなかつた。

「何んだツていゝ。羊ちやん、こんなものに何もいふんぢやないよ。また何を妨害するかわかつたもんぢやない。』と、母親は低い聲で呟くやうに言つた。

「昨夜からね、物干へ上つてお星さまを見ると仰ツしやるのよ。天文で大きい姉さんの安否が知れるんですツて。』と、羊子は母親の方に氣をかねながら、ひそ／＼と、囁くほどの聲で龍子に言つた。聞え

てゐるのか聞えてゐないのか、母親はニタ／＼笑つて、青い覆ひを被せた電燈、今漸く點いたのを見詰めてゐた。

母親が怒らないのに、幾らか力を得た羊子は、姉の方へ摺り寄つて、「昨夜おそくからよ、そんなことを言ひ出したのは……お隣家の小父さんとね、病人のやうでもなく、長いこと話して、それからよ。」と、今度はほんたうに哢いた二人で偷むやうに母親の方を見ると、矢張りニタ／＼笑つてゐた。「だけど、昨夜はあのお天気でせう。とても物干へは上れないし、上つたつてお星さまは見えないでせう。それでね、今日は朝からいゝお天気だつたから、晩になつたら、是非物干へ上つて天文を見ると仰ツしやるのよ。」と、羊子はわざと聲を高くして、母親にも聞えるやうに言つた。

『羊子ッ。』と、母親は俄かに顔の相を険しくして、叱り付けた『お前さんも、そんな碌でなしをいつまでも庇ひ立てすると、一緒に勘當するから。』と、母親は常に變つて凄く光る眼をいからしつゝ、ハタと羊子を睨みつけた。勘當などといふ古くさい言葉にも笑ふことが出来ないほど、龍子は息詰まるやうに切迫した感情に、胸を締めつけるのであつた。

『さア、羊ちゃん、早く物干へ上りませう。鶴やにさう言つて、梯子をね。……早く鶴やにさう言ふんだよ。』と叫ぶなり、母親は、すつくと床の上に立つた。今にも嘔みつきさうな其の形相の物凄さ。

羊子はたまらない様子をして、縁側へ駈け出したが、仰向いて、廂の先きから、空を仰ぐと、『阿母さん、駄目です、曇つて來ました。お星さまが見えません。』と、泣き聲で言つた。隣家の二階に新三郎の口笛が聞えてゐたが、其の圓い顔はまだ窓から現はれなかつた。

『さうかい。意地のわるいお天気だね。今夜もまたあんな嵐しになるのか知ら。』

さう言つて母親は、ふら／＼と縁側へ立ち出で、羊子の身體に縋りながら、上半身を突き出して、廂の先きに空を覗かうとした。其のとたん羊子は母の重みに堪へかねて、よろ／＼と庭前へ落ちたので、母親も共によろけ落ちたが、しかし倒れはしなかつた。跣足で苔の上に立つた二人は、苦笑ひをして空を仰いだ。空は梨子地のやうで、星が瞬きをしてゐた。『あら、ほんとに、スツカリ曇つてゐるわね。』と、母親は眼をくしやく／＼させながら言つた。

『小母さん、あの星が見えないの？ ちツとも曇つてやしないぢやないか。』と、隣家の二階の窓から出しやばりの新三郎が、頭と聲とを同時に出した。

『あツ、さうだ。お星さまがよく見える。……さうだ、さうだ。物干へ上るんだ。ひゅ／＼ひゅ／＼。』と氣味わるく笑つて、母親は裏口の方へ行かうとした。そこには、屋根の物干臺への上り口がある。

この家は、表の方だけに二階があつて、昔し商賣をしてゐた時は、龍子に恐ろしい記憶を深いく疵の如くにとどめさせた番頭赤川善一の起臥する場所になつてゐて、小僧たちの居た折りには、それも共に店のものが皆な其處で寝た。父が亡くなつて、商賣を廢めてからは、二階が土藏とよもに不用になつて、土藏は隣家へ譲り戸前を付け變へて、完全に隣家のものとなつたが、二階はどうも隣家へ譲るといふわけには行かないので、物置の代用にして、不用のガラクタ道具を押し込み階子段もとつてしまつて、家のものは皆な二階のあることを忘れてゐる。殊に龍子は土藏と二階とに悪感情をもつてゐて、人が二階の話をしたり、土藏のことを語つたりすると、機嫌がわるい。さうして、人にはこの家をば平家だと思はせ、自分たちも平家で押し通してゐるのである。

しかし、物干臺を使ふ時には、みんなが困つた。二階から上つて行けば何でもないのだけれど、それが出来ないとなると、梯子を造つて、裏口から物干臺へかけわたし、洗濯物などを抱へて、危くそれを昇つて行くのが、女中や母親の難儀の一つであつた。これもこの家の女王さまの感情を和げる爲めの犠牲だと思つて、辛抱してゐるうちに、女中だけは、スツカリ慣れてしまつて、猿のやうに梯子

を昇り降りしてゐたが、其の古い女中が、お嫁に行くので暇を取つた時、龍子は妙に寂しく哀しかつた。自分の負うた深い痛手に繃帯をしてくれる熟練な看護婦に行かれてしまふやうな氣がしたのであつた。何よりも先づ、後の女中が古い女中の如く、梯子で物干臺へ昇り降りが出来るであらうかと案じられた。閉ざされた二階が物干臺への通路として開かれるやうなことになるはしないかと、龍子はさも一大事の如く心配したのであつた。ところが其の後へ來た今のお鶴は羊子と同じ年頃の、子供々々してゐるだけに、身が軽く、敏捷で、伶俐で、最初から、梯子の昇り降りは、洗濯物を入れた大きなバケツ片手に自由自在であるのが、龍子は何よりも氣に入つてしまつた。

白晝でさへ、家のものが誰れか物干臺へ上る時は、お鶴を呼んで、其の助けによらなければならぬのだもの、日が暮れてから、病める母親が痛々しい足元をして、どうあつても物干臺へ上ると言ふのを引き止めることの出来ない以上、必らずお鶴を呼んで、それに母親の身體を背負はすやうにでもしなければならぬのであつた。龍子には娘ながら、一目も二目も置いてゐて、其の言ふことなら、いやでも聞いた母親が、一夜の中にスツカリ龍子をば敵のやうに憎み出したのだから、武子もゐなくなつた今、頭を押さへるものも、意見をすものもないので、言ひ出したからは、どうしても母親が自身姿を、物干臺の上に見出さなければ止まないものである。

「鶴も流石に困つた顔をしたが何を言つても駄目だと観念したらしく、甲斐々々しく身づくろひをして梯子をかけ渡すなり、自分だけさつさと物干臺へ昇つて、先づ小手調へのやうなことをした。それから、病める母親を龍子が後から押し、お鶴が背負ふ風にしなから手を取つて、そろ／＼梯子を昇りかけたが、母親は背後へ片手を廻はして、龍子の押す手を突き放した。羊子は不安氣な、哀しさうな顔をして身動きもしないで、棒の如く突つ立つて見てゐた。

漸く無事に、物干臺まで昇りおほせた母親は、空を仰ぎつゝ、美しく唄ひ出した。

紀伊の國は、

音無川の……

さうして、若い時、藤間へ通つた手振り足どり、をかしく、お鶴の持つて上つた細長い懐中電燈を扇子の代用にして、踊りはじめた。

六

紀伊の國を、屋根の上で踊り了つた母親は、ケロリとして、また暫らく空を仰いでゐた。空は晴れてゐるけれど、昨夜の嵐しの名残か、ところ／＼に細かくちぎれた雲の脚早く、風さへ出て来て、平

穩とは言ひかねる夜であつた。それに、もう梅雨近い空氣は重く濁つてゐるやうで、輝いてはゐても星の色に濕りがあつた。

「あれ、ごらん、鶴や、お星さまが泣いてゐらツしやるよ。おほかたあれは、わたしのやうに運のわるいお星さまなんだらう。』

母親のさう言つた聲にも、濕りがあつた。眼には涙が浮かんで、星の影がそれに宿つてゐるであらうと思はれた。龍子は羊子と顔を見合はせたが、二人の眼にも涙があつた。

『姉さん、上りませうか。鶴や一人ぢや、心細いでせう。若しも阿母さんが暴れ出したら。』と、羊子は氣が／＼りな風をして言つた。

『さうね。眞逆かそんなことはないでせう。屋根の上ですもの、阿母さんだつて、暴れにくいでせう。變なことでもありさうだツたら、羊ちゃん、あなたとけ上つて頂戴。わたしはね、阿母さんに憎がられてゐますから、……』と言ひかけて、龍子は胸が迫り咽喉が詰まりさうで、聲が出なくなつた。

『姉さん！』と羊子は、はふり落つる涙の露を、星明りに光らしつゝ、龍子に縋りついた。

『泣くものぢやありません、羊ちゃん。羊ちゃんが、しツかりしてくれなくツちや、仕様がないうちやありませんか。』と、妹の肩を撫で、勵ましたが、龍子自身もせき上げてくる涙を隠すことは出来な

かつた。

「姉さん、阿母さんは、どうして急に姉さんを、あんなに仰ツしやるんでせう。」と、羊子は継りついたまゝ、もうたまらないで、聲をあげて泣き出した。

「義理知らず、また羊子をいちめるか。」と、物干臺の上から、母親がハタと睨んで、見下ろした眼は薄明りの中に物凄く光つた。羊子の泣く聲が屋根の上まで聞えたのであつた。

先刻から、何處へ行つたかと思はれた小池が、この時、裏口にぬらツと顔を出した。こんな折に力を添へてくれなければと、不平に思つてゐた龍子は、『まだお歸りにならなかつたんですの？』と、いや味らしく言つた。

「歸つた方がいゝですか。あなたを送り届けさへすれば、僕の役目は済んだんですから。」と、小池は落ちつき拂つて答へた。

「小池さん、小池さん。……そいつは悪いやつだから、騙されちやいけないよ。鬼神のお松、姐妃のお百、大悪人の龍子……。」

さう言つて、下を睨んだ母親の眼は、また物凄く光つた。

「僕は歸らう。龍子さんも暫らくこの家に居ない方がいゝかも知れないね。あなたが側に居ると、阿

母さんは、ますますゝわるくなるよ。何んと言つたつて、病人だから仕様がな。昨夜一晩のうちにスツカリあゝ思ひ込んじまつたんだからね。よく利いたもんだよ、あの……離間策はね。少々利き過ぎで驚ろいてるだらう。」と、小池は隣家の方を見ながら、だんゝ聲を低くして、最後の一句は、龍子の耳に口を寄せて囁いた。母親が急に自分を憎み出したのは、病氣の爲めで、平生から自分に至らぬところがあつて、内心母親に不平を抱かせてゐたのが、一時に爆發した形もあるといふやうに、龍子は自ら反省したかつたのであるけれど、其の原因の一部がまた、お隣家の小父さんの舌にあるといふことを疑はずにはゐられなかつたのである。それを今、小池からも囁かれて、龍子は大きく頷いた。

七

「姉さん、どツかへいらツしやるの？ 困るわね。わたし一人で、どうしようか知ら。」と、羊子はもう溢るゝ涙を拭きもしないで、泣きさぐりとゝもに言つた。

「全く困るね、どうしたらいいだらう。」と、小池も途方にくれたといふ顔をした。

向ふ横町の

お稻荷さんへ……

屋根の上では、景氣のよい唄が急調子で始まつて、物干臺を踏みこはしはしないかと思はるゝほど母親は足音劇しく踊り出した。如何にも危なツかしい腰つきを氣にして、鶴が其の後から両手を擴げて附け廻はしてゐるのを、下から見ると、共に舞うてゐるやうであつた。

それを終ると、母親は何んだかわけの分らぬ、古代の今様歌のやうな、また後世の謠曲のやうなことを口にしながら、妙な手ぶり足どりで舞ひ始めた。お鶴は相變らず、両手を擴げて、今にも倒れるか、足を踏み滑らすかと氣づかふ様子で、後から附き纏うてゐた。

『うるさいね、邪魔ツ氣だよ。お前はもツと離れて踊るんだ。』と、母親は矢張りお鶴も共に踊つてゐるものと思ひ込んでゐるらしいのが、哀はれであつた。

『羊子さん、あなた上つておあげなさい。お鶴一人ぢや、どうも氣がゝりだから。……そして、うまくだまして、早く下ろすんだね。』と、小池はきツとなつて、命令するやうに、羊子の方を向いた。

『怖いわ。わたし。兄さん上つて頂戴？』と、羊子は涙の顔に寂しい微笑を浮べて滅多に使はない二兄さん』といふ言葉を用ゐた。小池は妙に感激に充ちた顔をして、

『いや。僕や姉さんが上つちや、阿母さんの感情がよけい激して、それこそ何をし出かすか分らないもの。是非羊ちゃんではなくツちやいけいなんだよ。』と、諭すやうに言つた。

『羊ちゃん、どうぞ上つて頂戴！ どうぞね、お願いするから。』と姉からも、懇願するやうに言はれて羊子は左右を顧みつゝもじ／＼してゐた。

『何を、べちやくちや喋舌つてるんだ。姦婦、淫婦……八年前の赤川だツて、何んだか知れたもんぢやない。』

歌も踊りも中止した母親は、物干臺の柱に捉まりながら、下を覗く風にして、こんなことを言ひ出した。龍子は哀しさうな、怨めし氣な顔をして、母親から姿の見られぬ軒下へ隠れた。小池も共に雨宿りの如き姿勢で、其の横に立つた。羊子だけが、母親の眼の届くところを動かかなかつた。

『可哀さうに、羊ちゃん。お前も大きい姉さんと同じやうに、其の義理知らずの姦婦からいぢめられてるんだらう。早くこツちへ、阿母さんの方へおいで。……』と、悲しさうに言つた母親の聲は可なりにかつた。龍子は夜陰に歎だてられる近所の人々の耳を恐れつゝ、あまりの情けなさに、また涙がはら／＼とこぼれた。遠慮してゐてくれると見えて、どこか窓からも顔は出ないやうであるが、耳を澄まして、この家の秘密を話の種にしようとしてゐる人があるに違ひないと思ふと、辛かつた。

物干臺の上が、急にひツそりとなつたので、氣がゝりなまゝに、龍子がまた竊と頭を出して見上げると、母親は一心に空を仰いでゐた。天文を見てゐるつもりなのであらう。

『あゝ駄目だ。武子はもう死んでゐる。武子の星は墜ちた。』

さう言ふともにも、母親はまた妙な手振り足どりで、踊り始めた。餘りに危なさうで、いよゝお鶴一人の手に合はなくなつたので、羊子も遂に決心して、梯子を昇つた。屋上では三人が亂舞の形となつた。

あツ、と叫ぶ間もなく、誰れかの足が物干臺の端の方を踏みこはして、三人一塊りに、ころ／＼としんと、屋根から轉がり落ちた。

八

母親だけは、すぐ起き上つて、すつくと地上に突ツ立つたが、あとの二人は一時的であらうけれど氣を失うたと見えて、折り重なつて動かないでゐた。突ツ立つた母親の額から、血汐がだら／＼と流れてゐるやうに思はれたが、ぐる／＼巻きにした黒髪が解けて、顔へ亂れかゝつてゐるので、よくは分らなかつた。何さき、黒鬼の如く恐ろしい母親の姿であつた。

「この義理知らず、ろくでなし。到頭わたしを殺す氣か。……親殺し。」と、母親は顔に亂れかゝつた髪を拂けうともしないで、疎らな間から、破れた簾を隔てゝ物を見るやうに、凄い眼を光らした。

「鶴や、早くお醫者さまを、今村さんをね。」と、龍子は一かど落ちついてゐるつもりで、何よりも先づ醫者を呼ばうとしたのであつたが、使ひに走らせようとして其の名を呼んだお鶴が、遭難者の一人であることを忘れてゐるなんぞは、全くうろたへきつてゐる證據で悲惨な滑稽であつた。

「鶴や、早くお醫者を。……今村さんをね。」と、母親は、さも／＼憎さげに、べた／＼と舌を舐すりつゝ、龍子の口眞似をした。

小池が、つゝ立ち寄つて、羊子とお鶴との折り重なつて倒れてゐるのを、抱き起さうとすると、お鶴の身體がびく／＼動いたやうに思はれた。忠實な彼女は、自分の名を主人に呼ばれて、氣を失つてゐる身體にも、務めを忘れぬといふ魂魄が働いたのであらうか。思へば、いちらしい少女である。

醫者へは小池が駈け付けて、いつもの若い背の高い今村さんと呼んで來るまで、ほんの僅かの時間が非常に長く感じられた。母親は、氣を失つてゐる二人を見ても、一向感じない様子で、どういふ風に頭が働らいてゐるのか、たゞきよろ／＼して、首を振つてばかりゐた。それでも、顔に亂れかゝつた髪の毛のうるさいことだけは分つたと見えて、片手で邪慳に、掻き分け拂ひ上げて、鳥の毛でもむしるやうに、引き抜いてしまひさうな、荒つほいやりかたであつた。龍子はまた今にも母親が「義理知らず。」と罵り立てゝ、噛みつきさうな勢ひを見せるであらうと覺悟しつゝ、哀はれた羊子とお鶴との氣を

失つてゐる側へ寄り添うたのであるが、なまじひ素人業にいちつたりして、却つてわるくしてしまつてはと思つて、一人づゝ軽く頬を撫でゝやるのさへ、恐るゝ指先だけをあてた。二人ともなんだか頬の肉が冷たかつたから、もうこれきりになるのではあるまいかと思ふと、胸がいつぱいになつて二人の冷たい頬に熱い涙が振りかゝつた。そこへ小池が醫者を伴うて、駈け込んで來たのであるが、あつちへふら／＼、こつちへふら／＼してゐた母親は、もう龍子を罵ることも止めて、いつの間にもまた梯子を昇つてしまつた。下の騒ぎには頓着しないで。

醫者の來ると、殆んど同時に二人とも少しづゝ、びく／＼と身體を動かしかけたので、龍子は躍り上らんばかりに喜んで、「羊ちゃん」と叫び、また「鶴や」と呼び、「しツかりおしなさいよ。」と勵ました。二人は、うん／＼と呻きかけたが、「痛い／＼。」と言葉さへ出るやうになつたから、龍子はホツと安心した。まことに八方塞がりともいふべき心配だらけの中に、少しばかり爪の垢ほど見出した果敢ない喜びと安心とであつた。

いつもよく喋舌る醫者だが、今夜は何が氣に入らないのか、むツつりしてゐて、多くを語らないので龍子も深く問はなかつた。母親一人の病氣でさへ、手不足で困つてゐるところへ、この二人がこんなことになつて、龍子はほと／＼困つてしまつた。母親はまた屋根の上で「ひゝゝゝゝ。」と氣持ちわる

く笑つてゐる。

出しや張りの隣家の父子が、今夜はまだ姿を見せない。

雲雀の宿

先づ生命には、誰れも別状はなかつた。羊子とお鶴との脳震盪も、手よりは口の方がよく働らく音楽好きの背のひよろ高い醫者が、今度だけは、口よりも手の方をよく働らかしてくれたと見えて、翌日はもう起きられるやうになつた。腰と腕にも少々打撲傷があつて、紫色に腫れてゐたが、不思議と頭部に傷がない。頭を一番に打ち付けたのに違ひないが、と言つて、亂れた髪を掻き分けつゝ、醫者は幾度か顔部を改めたが、二人とも外部には格別の異状をみとめなかつた。これが不思議の一つ。

不思議の二つは、あの時血が流れてゐたやうに思はれた母親の額のことを、何さまあの元氣で、びんびん跳ねて、龍子の悪口ばかりしてゐるので、つひ其まゝ忘れてゐると、血は自然にとまつたけれど、一夜の中に傷口が腫れて来て、朝見た時は、いよ／＼四谷怪談のお岩のやうな顔になつてゐた。

小池が泊つてくれたので、まア好かつたやうなものゝ、羊子もお鶴もまださう動けないので、龍子は何もかも獨りでしなければならなかつた。しかし、奥座敷を其のまゝ病室にしてしまつてゐる母親

の側へ行くことだけは、男手の不器用ながら、スツカリ小池に頼んだ。

「この義理知らず、ろくでなし。犬畜生ツ。よくも姉の男を寝取つて、姉を殺したな。……今にもこの親を殺す氣だらう。」などゝ、母親は龍子さへ見れば、いきり立つて、罵り騒ぐので、お岩のやうな其の顔の恐ろしさ、理由もないことを言はるゝ心外さ、を忍ぶとするも、それが爲めに病勢の昂進するのを憂へなければならなかつた。

そこで、小池とも相談して、龍子は一切母親の病床に近づかないことにきめたのであるが、さうなるとまた淋しくて、物足りなかつた。睨まれても罵られても、矢張り接近してゐたかつた。これまで長い間、さながら親一人子一人といふ風に、龍子ばかりが母親の相談あひてになつて、いろ／＼のことを處理して來たのであるから、それが今俄かに離れてゐなければならぬ、顔を見合はせることもならない、といふことになつた悲しさ、辛さ。

氣が狂れてゐても怒つてゐても、母親の方にだつて、龍子が側へ來ないといふことに淋しさの感じがあるには違ひなかつた。武子を失うた上に、まア龍子を見ることが出來なくなつたとすると、たゞさへ淋しい病床の冷たさ、哀はれさが思ひやられた。

「小池さん、星一さん。あなたもあんな義理知らずに引ツかゝつてると、今にどんな目に遭はされる

か知れたものぢやありませんよ。あれはほんとにわるいやつです。」

不器用に男の手で、病人に食事を進めてゐる小池に向つて、またこんなことを言つてゐる母親の聲が聞えた。食膳を襖の外まで、自分の手で持つて来て、そこから小池に引き渡してからも、龍子は氣になるので、襖の外に立つて、様子を窺つてゐるのである。

「いゝえ、僕は龍予さんを尊敬してゐます。」

少しは反抗的に言ふ小池の聲が、靜かに聞えた。

「尊敬？ あんなものを。……」と、口に食物を含みながら言ふ母親の聲。

「さうです。龍子さんの總ての天分を除いても、僕はたゞ純潔な處女として、龍子さんを尊敬しないではゐられません。」と、肩をいからして言つてゐるらしい小池の聲。

「純潔な處女？……ひゝゝゝゝ。飛んでもない小池さん、龍子が處女なら、わたしも處女だよ。」
えらいことを言ひ出した母親の聲。

二

龍子はたまらない氣持ちになつて、ばた／＼と、茶の間の方へ逃げた。彼女がこんな高い足音をこ

の家でさせたのは、珍らしいことであつた。或ひは生れて初めてかも知れなかつた。

茶の間がたゞ一人なのも淋しくて仕ようがなかつた。お鶴でも居てくれたらと思ふけれども、昨夜の今日で、まだ身體を痛めてゐる忠實な可憐なものを、女中部屋から引き出すに忍びない。羊子も寝てゐる。あれの枕頭へ行つて慰めてやらうかとも思つたが、あの室からは、奥座敷の母親の高聲が聞える。母親は今小池に何を話してゐるであらうか。それを考へると慄然とする。

いくら氣が狂れたと言つても、娘の一大祕密を、其の愛人に近い男の耳へ入れる母親の残忍性が、怨めしかつた。誰れも居ないこの淋しい茶の間で、自分は靜かに考へなければならぬと、龍子は思つた。

今まで、この祕密——八年前番頭赤川との一條——自分が處女ではないといふこと——を、今まで何故小池に打ち明けなかつたか。それが龍子の第一の悩みであつた。そんなことを打ち明ける程度にまで、自分と小池との關係は進んでゐなかつたのか。いや、さうでない。この一大祕密が、小池の前に破れた折りの恐ろしさを思うて、自分の戀の足取りが鈍かつたのだ。小池の方からは幾度あせツて迫つたか知れない其の度びに自分は、古風に言ふと、柳に風と受け流して來たのだ。それはわるいことであつたかも知れない。徒らに男を操ると非難されたとして、拒みやうがない。しかし、それは皆な自分

に八年前の古疵があるからだ。癒さうとしても癒すことの出来ない其の疵、拭はうとしても拭ひ切れない其の穢れを、秘密のままにして、愛人を欺くことが出来ようか。さらば愛が完全に成り立つ前に、其の疵其の穢れを愛人の前に、暴露して、秘密のない自身となるのが第一だと思はれるけれど、それはまた自分に取つて、ひどく恐ろしいのだ。何人よりも、婦人の處女性を崇拜する小池、戀愛は必らず男女とも童貞の上に成り立たなければならぬと、窮屈な解釋をして、いづれか一方が童貞に缺けてゐれば、其の戀愛は甚だしい不潔だと、屢々公言してゐる小池、其の小池の前に、今更ら自分は處女でなかつた。……とは、どうしても言ひ得なかつたのである。一舉に事を決するのが恐ろしくてぐづぐづの中にこゝまで小池を引き摺つて來た。小池も辛かつたであらうが、自分も苦しかつた。二人は別々の意味で、同じやうな煩悶をつゞけて來たのであつた。さうして、今日の斷末魔に到着した。

あの調子なら、母親は何もかもベラ／＼喋舌つてしまふに違ひない。それを、どの程度まで小池が信用して耳を傾げるか、それはわからないけれど、いくら狂女の言葉だとして、問題が問題だから、決して聞き棄てにすることはなからう。

『あゝ、もう駄目だ？』

戀するが如く、戀せぬが如く、愛するが如く、愛せぬが如く、靡くが如く、靡かぬが如く、曖昧至

極な態度をつゞけて、自ら惱やみ、男をも惱やませて來た自分の偽りの生活が、今はのきはに押し詰まつた。

『あゝ、もう駄目だ！』

お膳の上に瀬戸物の鳴る響きと、氣の故か、稍や荒々しい足音とが、相和して、小池が奥の病室からやつて來る。

三

小池の顔は蒼白く見えた。彼、龍子の前へ、がちやんと、ひどい音をさせて、母親の喰べ荒らしたお膳を置くと、

『あゝ、いやだ、やアだ。生れて初めて給仕人をしたよ。』と言つて、溜息を吐いた。

『どうもお氣の毒さま。ほんとに済みませんわね。』と、龍子はおど／＼しながら、平凡なことを言つた。

『鶴、鶴、鶴や、お鶴。』と、甲走つた聲が、奥の病室から聞えた。

『は、は、は。』と、小池は、懶さうに、低く返辭をして、靜かに立つて行つたが、すぐ戻つて

来て、『お茶のもつと温いのが欲しいんださうだ。』と、苦笑ひをしながら、大きな湯呑を盆に載せて持つてゐた。

『僕は今日から、此家の下僕だ。』と言ひ、冷めたい鐵瓶の湯で、湯呑の中のものゝ加減をしてゐる氣の毒さに、龍子は黙つて、其の湯呑をば、奮ふやうに小池の手から取るなり、赤いお盆に載せて奥座敷へ、母親の病床近く進んで行つた。母親は床の上に坐つて、庭の方を見てゐたが、其の眼は、隣家の羽目板にばかり注がれてゐるやうであつた。

『小池さん。』と、振りかへりもしないで言つた母親は、龍子の入つて來たのを小池だとばかり思つたらしく、『濟まないが、ちよつとお隣家へ行つて來て頂戴。』龍子には内證でね。』と言つてから、太儀さうに、また痛さうに、首を捻ぢ向けると、紫色に上半面の腫れ上つた顔で、憂ひに眼鏡も曇る龍子の顔と向きあつたので、ハツと驚ろいた其の様子、氣味わるさ。恐ろしさ、物凄さ。

『温いお茶を持つてまゐりました。』
少し聲を震はせて龍子のさう言つたのを、皆なまで聞かずに、母親は、ぶる／＼と身を慄はせてさきり立つた。

『何んだ、温いお茶だ。そんなものはいらない。いりませんよ。……熱いお茶ならいゝが、わざ／＼

温いお茶を持つて來て、親に飲めと言ふのか。あゝ分つた毒が入つてゐるんだらう。わたしはまだお前には殺されないよ。……義理知らず、ろくでなし。親殺し。……』と、口から出まかせに惡態を吐く母親を、龍子はじつと見て、發狂を装うてゐるのではあるまいか、偽氣ちがひではないか、といふことを考へた。さうして、隣家の羽目板にきつと眼を注いだ。

『昨夜、わたしを、物干から突ツ轉ばしても、殺せなかつたから、今度は毒を盛つたな。こんなものわたしが飲むと思つてゐるか。義理知らず、碌でなし、姉殺し、親殺し。』と、つゞけさまに叫んだ母親は、龍子の持つて來た湯呑を取つて、ぱつと投げ付けた。開け放つた障子のあなた、庭越し 羽目板を見詰めて、隣家のことばかり考へつゝ、母親の方の警戒を弛めてゐた時とて、不意に飛んで來た湯呑が、龍子の頬にあたつて肩から胸から、温い茶を浴びた。

『かつぼれ、かつぼれ。甘茶でかつぼれ。……』と、母親は黄色い聲で唄ひ出して、今にも起つて踊りさうにした。龍子は黙つて、湯呑のあたつた頬の痛むのを、強情に撫でもせず、着物の濡れたのに手巾もあてないで、悄然と母親の枕頭を退いた。

『獨りでえらがつてるから、あの女はお釋迦さまのつもりだらう。天上天下唯我獨尊とかいふことも考へてるんだらう。……もつと甘茶を浴びせてやらうか。ひゝゝゝゝ。』と笑つた母親の大きな聲を、

龍子は廊下で聞いた。

足音もさせないで、茶の間の入口に立つと、小池は背後向きになつて、男泣きに泣いてゐるやうであつた。其の肩のあたりが、しょんぼりと、哀はれ深く見られた。

四

龍子はいつまでも、其のまゝ突ツ立つて、小池の泣いてゐるのを見てゐたいと思つた。もうスツカリ冷やかな心になつて、自分の身體には血も流れてゐなければ、涙も湧かない女になつてしまひたかつた。

其のとたんに、小池がひよいと、こつちを向いた。彼れは急いで、眼を押さへつゝ無理からするつづけさまの咳拂ひに、一切を紛らさうとしながら、立つてどこへか行きかゝつた。

『お歸り?』

後から考へれば、よくもあんな冷やかな態度が執れたものだと思はるゝやうな調子でかう言つて、龍子は、涙に潤うてゐる小池の眼を、意地わるく見詰めた。

『いゝえ、ちよつと隣家の宮川へ』と、小池は面はゆ氣に、顔をそむけて言ひ／＼、逃げるやうに

玄關へ出た。それをば執念深く龍子は追ひ縮つて、『もうこつちへは入らツしやらない?』と、また冷やかな言葉を水でも浴びせるやうに、瘦せた男の背中から浴びせかけた。しかし、小池はそれに答へなかつた。

茶の間へ戻つて、獨りぼつねんと、火のない火鉢の脇に坐つた龍子は、自分の爲めにも、家の爲めにも、スツカリ考へ直さなければならぬ時が來たといふことを、痛切に感じて、冷たい灰の中へ鋪びた眞鍮の火箸で、書くあとから、書くあとから、崩れて消えるいろ／＼の字を書いた。其の字の中には、『絶望』とか『悲哀』とか『自殺』とか『逃避』とかいふ字もあれば、『勇氣』とか『戦闘』とか『冷酷』とかいふ字もあつた。

表の格子戸の開いたのも知らず、足音も響かなかつたけれど、龍子は忽ち背後に人の近づいた氣色を感知した。さうして、態と意地強く、知らない風を装うて、灰の上に字を書きつけてゐた。『別れ行く身の果ていづこ……』と、短歌らしいものゝ上の句を灰の上に書き了つて、文字の蹟も留めぬ長火鉢を覗き込んでゐる時、背後から、

『わあアツ。』と叫んで、いつもの通りな、軽い薄ツペらな風で、龍子の背中を叩いた新三郎をば、振りかへり見ようとししないで、龍子はまた灰の上に字を書き始めた。

『龍ちゃん、火鉢の中なんぞへ字を書かないで、この返事を書いておくれ。早くだよ、すぐにだよ。』と促し立てた新三郎は突ツ立つたまゝで、坐らなかつた。近頃は盛んに運動をやるので、黒く巖丈になつた手から、だん／＼瘦せの見える白く細い手に渡された手紙は、言ふまでもなく小池からのものであつた。

『今日かぎり、あなたと絶交します。理由はわたしの持説たる處女崇拜から來てゐるのです。わたしは後々になつても、決して今日の行爲を輕率として、悔ゆることのないのを信じ切つてゐます。』

かう書いた小池の筆蹟が、薄く粗末な狀袋から出て來たのを、すうツと一氣に讀み下して、龍手は眉一つ動かさないで、

『承知しました。お返事は別に書きません。』と、氷柱のやうに尖つた冷やかな言葉を發したが、新三郎はどうしても書いたのを求めて止まなかつた。そこで龍子は自分の室へ入り、一枚の紙に大きく、『承知しました。寺島龍子』とだけ、幼い頃の正月の書き初めのやうに書いて、狀袋にも入れないで新三郎に渡した。さうして新三郎の出て行く後姿を見送りもしないで、小池の手紙をすた／＼に引き裂き、口へ入れて紙礫にしたのを、黒く煤けた天井に投げ付けると、其のまゝくツ着いて落ちて來なかつた。

其の夜から、母親の狂態は龍子に對してばかり、いよ／＼劇しくなつて、龍子の姿さへ見れば、惡態を吐き散らし、つゞいて必らず有り合はしたものを投げ付けた。

龍子の家出……それは、二三日無理に辛抱した上、羊子とお鶴との健康のすツかり回復するのを待つて、朝早く誰れも知らない間に、姿を消してしまつたのであつた。

五

どこへ行く、と考へのきまつてゐたわけではなかつた。支度もそこ／＼に、着更へ其の他手廻りのものを風呂敷に包み、お金だけは幸ひまだ自分の自由になる權利を剝がれてゐなかつたので、銀行の通帳を持つて、龍子はこつそりと家を抜け出し、銀行までぶら／＼歩いて、表が開くなりすぐ飛び込んで、少し餘計にお金を引き出し、銀座へ出て、鞆其の他を買ひ、キリリとした旅装を調べて、折柄通りかゝつたタクシイを呼び止め、前後を見廻はしてそれに乗ると、悪い道路を眞ツ直ぐに、揉まれるやうに揺られて、わざ／＼品川まで走つた。

大丈夫だと思ふけれど、追つ手がかゝりさうに思はれて、大きな聲で話しながらやつて來る人たをば、初めから自分に無關係だと知りながら、少しづつ恐れなければならなかつた。風の音にも驚ろ

くといふ落人の心弱さと哀はれさを、龍子はしみく待合室の中で感じた。

十時何分の小田原行きといふのへ、眞鶴までの切符を買つて、龍子は、俯向き勝ちに、成るだけ人の顔を見ないやうにして乗り込んだ。廣い二等車はガランとして、自分のほかに五人ばかりの客しかなかったのを、男女の別さへ見きはめないで、俯向いたまゝでゐた。今にどこからか『おや、どちらへ。』と聲がかゝりさうな不安に、いよ／＼身を縮めた。大森を過ぐる頃漸く頭をもたげて、先づ窓の外を見た。野にも丘にも、早や夏景色が十分に調うて、沼といふ沼には小さい溜り水に人の子等の泳いでゐるのが見えた。くり／＼と丈夫さうな其の姿、澁紙色に焼けた裸體の全身像には、太陽の恵みが十分に加はつて、天地の大自然に可愛がれてゐるのが、羨ましく思はれる。四五人で濁つた浅い水を更らに濁してゐるのであるが、汽車の走る短い時間に見ただけでは、男と女との判別がつかかねたけれど、二人だけは確かに女であつた。龍子はいつかの雨の夕横濱から歸つた時、納戸で着物を更へる序でに、大鏡に映して見た自分の偽らぬ全身像のことを思ひ出し、腕を上げると肋骨の數へられさうな貧しい體格をば、今更ら悲んでみた。汽車の窓から豆粒のやうに小さくなつて遠ざかり行く裸體の子等の姿を、出来ることなら、汽車を停めて、もつと見てゐたかつた。立松男爵の母堂からのあの變な贈り物、細長い匣に入つた時彦の妙な寫眞を、破り棄てゝ來ればよかつたのにと考へた。

北の方につゞいた森の奥が、あの姥ヶ谷にあたるのではないかと、姉の痛はしい面影が眼先にちらついて、確かではない其の安否に、涙ぐまれたけれど、今は自分の身をどうしやうかといふことに、先づ悩まなければならなかつた。汽車が横濱に着くと、龍子はまたじつと俯向いて、人に顔を見られないやうにした。

小田原の乗りかへに、長いこと待たされて、漸く眞鶴へ着いたのは、四時過ぎであつた。この時まで、まだどこへ落ちつくといふことがきまつてゐなかつた。海や山の風景なども、今日は全く自分と関係のないもので、たゞあの浅い溜り水にぼちや／＼遊んでゐた裸體の子等の姿ばかりが、いつまでも懐かしまれた。

行く先も湯河原ときめたのは、眞鶴の改札口を出た瞬間であつた。それから一時間ばかり、ひどい路を自動車に揺られ、揉まれて、漸く湯河原の宿へ着いた。

何よりも先づ、温泉に浴して、透明な湯に浸る白い身體の、戀に破れた哀れさを、近頃殊に瘦せ衰れた肉の上に、つく／＼眺めてゐると、音もせぬ湯槽の靜けさに、誰も入浴つてゐないと思つてか、勢ひよく飛び込んで來たすらりと肉つきのよい紳士が『おや、龍子さん。』と叫んだ。

一三年前に母親とこの温泉宿へ来た時にも、入浴中を突然異性の客に踏み込まれて、ずむぶん迷惑したことがあつた。それは温泉だから仕方がないやうなもの、湯槽は方々にあるのだから、よし空いてゐるのはなくとも、男ばかりで入浴れるのがあらうに、わざ／＼こゝを狙つて来たと思はるゝ男の卑しさを、睨み付けてやりたかつた。ところが、今日のはさうでない、確かに誰れもゐないと思つたのに、若い女が一人、まるゝ石像を沈めたやうにして、静かな上にも静かに、湯の面を鏡の如くにして、首だけを水平線の上に露はし美しい身體を透明なアルカリ泉の中に映して見せてゐるのだから、さうして、それが知つてゐる女性であつたのだから。

『龍子さんですね。矢ツ張り龍子さんだ。』と、再びさう言つて、すんなりとした體格の紳士は、後退りに、狼狽の色を見せつゝそれでも、もじ／＼と立ち去りかねてゐた。

この紳士が高山であることを、龍子が知るまでには、少し時間がかゝつて、いつもほど敏感でなかつた。それには眼鏡をはづしてゐたことも一つの理由になるけれど、何にせよ虚弱な身體に、先頃からの奔走と心勞とが、殆んど堪へ切れぬ負擔となつた上、また今朝からの打撃が加はつて、流石に勝氣

な婦人も、ぼんやりと夢の如く湯に浸つてゐたからである。このまゝかうやつて、靜かに地の底に沈んで行く術もないものか。深く／＼此の清らかな湯槽を柩にして地の底に埋められた上へ、白い砂や黒い土が覆ひかぶさつて、其の土の上に青い麥が伸び菜の花の黄色いのが咲き、雲雀の歌が土や砂を通して、地の底にまで聞えて来る。自分の身體がかくして永久に人の目に觸れることがないならば、自分の魂魄の、即刻この身體から離れ去ることを厭はないばかりか、寧ろそれが望ましいけれども、魂魄が肉體を離るゝ折りの苦痛は忍ぶとしても、むごたらしく傷ついたり、醜く膺りかゝつた遺骸を、人目に晒すことは、生きてゐる間の執着から来る未練であらうけれど、どうしても厭やなことだ——こんなことを、龍子が惱める頭に考へかけてゐた時、突然裸體紳士が闖入して来たのであつて、此方よりもよけいに驚ろいてゐる先方の顔を、確かに高山の顔だと知つたのは、『どうも失禮しました。いづれ後程。……』といふ言葉を残して、高山があわたとしく逃げ出すちよつと前であつた。

そゝつかしい人だ。と笑ふ氣にもなれないで、龍子は自分のこれからの運命に就いて占ふやうに考へた。其の頭の中の笠竹や算木に現はれたものは、姉の死、自分の死、か護の島の没落、母と妹との流浪といふやうな、大凶ばかりであつた。

憂愁に充ちた蒼白い顔にも、ぼろつと逆上せて血の色が潮して来るまで、龍子は湯に浸つてゐた。

漸くに這ひ出ると、足元がフラ／＼して、危なツかしかつた。

室へ歸つて、ぐツたりと、溶けてしまひさうな懶さの身にも、矢張りお化粧はしないでゐられなかつた。浴衣を脱ぎ棄て、衣裳ケースの中のものにちゃんと着更へて食事を終つたところへ、高山が女中に名刺を持たせて、四角四面に訪問の前觸をして來た。さうして間もなく、紋付きの羽織に着流しの、様子のいい紳士を迎へた龍子は、ジツと眼鏡の眼を伏せて、自分の方からは、何も語り出さなかつた。

『妻が到頭、亡くなりました。……』と、高山は沈痛な調子で、先づ口を切つた。

七

『まア、左様でございますか。』と、龍子は漸く頭を擡げたが、驚ろきの眼を瞠るのさへ、痛ましく、氣の毒に感じて、其のまゝまた差し俯向いた。

『ほんとに飛んだことございましたわね。』と、龍子は細い聲で言ひ足して、自分の膝の急に瘦せの見えるやうに思はるゝのを、ジツと見詰めてゐたが、唯れのためにもなく、一雫、二雫、熱い露が落ちた。

『お一人ですか、あなた。』と、高山は些か手持ち無沙汰にして、一人では廣過ぎる室を見廻はしたが、次の間も附いてゐて、取り散らかした鏡臺が、ぼかんと抽斗の口を開けたまゝになつてゐた。

『えゝ、一人でございますの。』とだけ、龍子は答へた。

『お姉さまも、飛んだことございましたね。まだお分りにならないでせう。』と、高山も鼻を詰まらせて言つた。夕景色がおひ／＼と欄干の外に黒くなりかゝつて、この二階座敷から見下ろさるゝ藤木川の溪流から、霧が雲のやうに湧いた。

『姉は多分、もう生きては居りませんまいと存じます。』と言ひ／＼、龍子は手巾を眼にあてた。

『實は、……』と、高山は改まつた調子で衣紋を繕ひながら、『こんなことを、あなたのお耳に入れるのは、わたしの忍びないことですし、あなたとしては、限らない御迷惑でせうが、亡き妻の意志を空しうしない爲に、一通りのお話だけはいたしますから、どうか氣持をわるくなさらないやうに、お聞き下さい。』と高山は聲を潤まして、仔細あり氣に言ひ出した。同じ宿に泊つてゐるのに、わざ／＼紋付きの羽織に、着物まで着更へて來たのは、婦人を訪問する禮儀ばかりでなく、改まらなければ話せない筋があつたのかと思つて、龍子は心身共に疲れ切つてゐるこの場合に、そんなむづかしい話なんぞ聴きたくはなかつたけれど、さりとて、むげに拒絶することもならなかつた。

『失禮でございますが、こちらへお出で下さいませんか。』

さう言つて、龍子はヴェランダまがひの廣い縁側へ高山を誘うた。そこには、藤の脇掛け椅子が、丁度二つあつた。溪流の音は更らに近く、密談を妨げようとして響いて来るけれども、隣室とは壁に隔てられてゐる上、其の客は今しがた出立したらしかつた。

『妻が自殺を企てましたのは、龍子さん、あなたが原因になつてゐるのです。』と、高山は意外なことを言ひ出した。細い腰をおろしてゐる藤の脇掛け椅子が、ミシリと音を立てるほど、龍子は驚ろきに全身を慄はした。咽喉が詰まつて、急に言葉も出なかつた。

『いや、さう驚ろいちゃいけません。話の順序として、そこからお話ししなければならぬのです。』と高山が、國際談判でもするやうな、嚴かな、さうして辭令に富んだ言葉で、語つたところによると、近頃高山の家庭の談話の中心は、龍子の噂さばかりで、それがいつも、高山があまりに龍子の才色を譽め過ぎるところから、夫人に不快を抱かせることになつてゐたが、其の不快は嫉妬と變じ、遂には圓滿をもつて誇りとしてゐた家庭に風波を起すことになつた。そこへもつて來て、田舎代議士の青木が、何の目的でか、蔭からいろ／＼と、高山が龍子を戀してゐるとか、龍子が高山を思つてゐるとか言つて、焚き付けるので、夫人の嫉妬は、あの肥つた圓い身體に不似合ひな劇しいヒステリーとなつ

て、風の夜に原の中の古井戸へ身を投げるといふやうな結果になつたのである。長い間夫の愛に浸り切つて、嫉妬といふやうなことは、文字でだけ知つてゐた。無邪氣な、子供々々した婦人であつただけに、一旦嫉妬の毒を身に受けては、其の廻りかたも甚だしくて、思ひ詰めたことをしたのであらう。

『それでも今はの際には、もとの無邪氣な善良さに立ち還つて、……わたしの亡き後は、龍子さんと結婚して、わたしを愛したやうに、龍子さんを愛してあげて下さい。……と申しましたよ。』と、高山は最後に、言ひにくさうな風でさう言つて、涙を飲んだ。

八

意外な高山の話に、其の夜の龍子は今にも切れようとするほど弱つてゐる琴の絃が、高い調子で掻き鳴らされたやうな、心細い緊張さを覺えて、どうしても眠られなかつた。しんが疲れぬいてゐるのでうつら／＼となりかけても、すぐに愕然とした覺醒が來て、節々の痛む身體で寝がへりをしなければならなかつた。電燈を消すと、いろ／＼の人の顔が、幻の如く浮んで來て、交々怨みを言ふやうな氣がするので、其の怨みに對して一つ／＼反駁を試みると、理窟では皆な先方が負けて、幻影は更らに他

の幻影に變る、姉、母、高山夫人、立松母堂と、幻の如く現はるゝ人の顔は、皆な女ばかりであつた。あまりにうるさいので、立つて電燈を點けると、幻影は皆な消えて、溪流の音が急雨の如く、俄かに耳を襲つて来て、疲れた眼はいよゝゝ冴える。そんなことを繰り返して繰り返して、電燈を點けたり消したりしてゐる中に、夜明けが近づいて、漸くとろゝと眠つた。

起きてからの心持ちは、流石に爽かであつた。清らかな山の空氣が、都會の塵を含んだ五臟をスツカリ洗つてくれて、もろゝの人事の憂愁も、この美しい自然の前には、殆んど無力のものとなつたといふ氣がした。

寢衣姿のまま、楊枝を銜へて、昨夜しみぐと高山の語つたヴェランダまがひの縁側に立つと、夏の太陽はまだ高い山のあなたにあるらしいけれど、晧はしい日の光りは玉を溶かしたやうな溪流の底までを照して白い礫、青い礫が一つゝ數へられた。芥や木の葉が、流れたり、沈んだりしても、それが皆な綺麗に輝いて見えた。龍子は、白く光る石像の如き姿になつて、あの清らかな流れに、自分の遺骸を浸したいといふやうなことを考へた。この皮膚が水晶の如く、美しく、淵から淺瀬へ、遺骸が半分流れ込んで、名工の鑿の痕を偲ばせるいゝ形を見せ、この黒髪が長く解けて、あの水に弄ばれてゐる。其の時自分の魂魄は、胸の赤い駒鳥となつて、あすこの山毛櫨の枝から、自分の彫像のやうな遺

骸を見下ろしてゐる。――

儂い空想に浸つてゐた身體をば懶く浴室に運んで、人の居ない湯槽を選び、また昨夕のやうに、音も立てずに、白い身體を透明な温泉に浸したのは、それから一時間も後で、他の客はもう皆な朝飯を終つて、散歩に出たり、前の廣場に設けられた弓場で、的を外れる矢ばかり射てゐる頃であつた。さうして、龍子が漸く湯からあがつて、お化粧を済ませ、朝飯を終つた頃、他の客は散歩から歸り、弓に飽きて、またぞろゝと浴室へ行つた。

高山が、ちやんと背廣を着て、麥稗帽子とステッキとを持ち、廊下に立つて散歩を誘つたのは、それからまた一時間ほど後であつた。たいして氣が進まなかつたけれど、美しい死に場所でも探しに出る心で、龍子はすぐ同意した。それで高山をば、廊下に立たせたまゝ、念入りに支度を調べ、持つて来た衣裳ケースの中のものゝ、一番上等なものを着て、有りツたけの装身具を身につけたのも、死出の旅路の首途を飾りたいやうな心持ちであつた。

連れ立つて表へ出るとき、帳場の脇にある大鏡に映つた二人は、夫婦として眺めても、さほど不自然ではない姿であつた。

溪流に沿うて、山の麓を奥へと少しづゝ登つて行く道すがら、高山は夫人の變死を全、新聞に出な

いやうにした苦心や、其の骨がまだ其のまゝ、目黒の自宅の、ピアノの上に載せてあることなどを語つた。

二人はやがて、山の麓の丘の上に設けられた、雲雀の宿と名づくる小遊園に登つた。そこには四阿もあり、泉水もあり、小猿が泉水の傍の木に昇つて遊んでゐた。

九

雲雀の宿の主とも思はるゝ人が、小猿に行水をさせようとして、バケツに水を汲んで来たが、小猿は行水がいやだと言ひたげな風で、木の上に高く逃げ昇る。それを無理に引き下ろして、バケツの中へ入れようとする、狡猾な小猿は、もう許して下さい、素直に行水をつかひますから、と言つたやうな殊勝さを見せるので、主人が少し手を弛めた。とたん、小猿め、バケツに入らないで、細い足でバケツの縁を踏んで、巧みにひツくりかへして、水をこぼしてしまふ。泉水の汀へ泳ぎ寄つて、バク／＼口をあいてゐた金魚たちは、不意の洪水に驚ろいて、まん中の方へ逃げてしまふ、再び木の枝に駆け昇つた小猿は、キキキと嘲笑ふやうに鳴いて、主の禿げかゝつた頭のとツペンを見下ろしてゐる。

『畜生ツ、またあの手に引ツかけやがつた。』と、主は忌々しさうに、小猿を見上げて呟いたが、其の

眼には、この動物を息子のやうに見るらしい慈愛の色が輝いて、顔は金魚の躍る泉水とよもに、ニコニコと、漣を立てた。憂愁の色を浮べ合つてゐた龍子と高山とは、おぼえず莞爾と微笑の顔を見交はしあつた。

『奥さま、どうぞおかけ遊ばして。……旦那さま、どうぞこちらへ。』と、主婦らしい人は、縁臺の緋毛氈の上へ、麻の座蒲團を二つ並べて、愛嬌を振り撒いた。『奥さま』と呼ばれても、赤くなるほどの血汐は、もう龍子の顔面に流れてゐなかつた。何かなしに、死の一点を見つめたい心持ちで、其の眼にはもう黒い瞳さへ失はれたかと思はるゝほど、白晝の明るさのあなたに、暗闇が擴がつてゐるのを感じた。

『有りがたう。……』と、高山はそれでも得意氣に言つて、縁臺に近寄つたが、腰をかけるはしなかつた。

『あちらに小亭もございます。』と、主婦は言つて、茶菓を捧げて来たが、其の後から、『雅客芳名録』とした畫帳形の折本を持ち出したので、二人は覺えず、あつと叫びたい氣持ちで、縁臺の側を飛び離れた。

飲まぬお茶に對して、若干の茶代が、怖さうに再び縁臺に近寄つた龍子の手から置かれた後、二人

は雲雀の宿の背後の丘を傳うて、無理に切り開いた瘦せた畑に、麥稈の黄色く伸びてゐるのを見ながら、藤木川の上流を志して進んだ。飄逸を看板にしてゐるらしい丘の上の茶亭に、其の飄逸を味ひかねるまでに、心の切迫してゐた二人は、たゞ／＼人なき深山の奥が望ましかつた。二人別々の心で。

『龍子さん、あなた、わたしと結婚してくれませんか。』

幾度か口をもぐ／＼、唾液を呑み込み呑み込みした果ては、溪流に橋のない岸へ行き詰まつてから高山が到頭思ひ切つて、かう言つた時も、龍子はもう其の突然に驚ろかなかつた。

『結婚でございますツて？……わたくしそんな暢氣な心になれませんの！』と、穩やかな、しかし、熱のない調子で言つて、龍子は銀の箭の走るやうな、清らかな水の流れに見入つてゐた。水の流れと人の行末！……そんなことをも考へつゝ。

『結婚が暢氣ですツて？』と、高山は些か氣色ばんで言つた。

『人間のすることが、すべて暢氣に見えますの！今のわたくしには。』と、龍子は矢張り水の流れを見詰めてゐた。

『妻が亡くなつて、一週間にもならないのに、もう結婚の話を持ち出すなんぞ、すゐぶん淺ましい男だと思はれるでせうが、妻の最後の遺志を重んじて、わたしはお話だけを先きにしときたいのです。』

と、高山は濕やかに言つた。龍子は何んとも答へなかつた。

溪流に危ふげな丸木橋を發見して、龍子は高山に、手をとられつゝ、それを渡つた。少し行くと、瀑布があつて、日光の華嚴の瀑布を小さくしやうな姿をして落ちてゐる。龍子は、飛沫に濡れるのを厭はないで、つと其の瀧壺に近く進んだ。

10

『われ鍋に綴ぢ蓋、といふことがありますけれど、あなたがわたしと結婚して下されば、銀の鍋に、綴ぢ蓋は綴ぢ蓋でも、銀の鍔で綴ぢますよ。』と、高山は龍子の後から、麥稈帽子が飛沫に濡れるところまで寄つて來て、口を耳に近づけつゝ言つた。聲が瀑布の音に消されるので、幾度か聞きなほして、龍子は漸くこれだけの意味を會得したのであつた。高聲の囁きといふやうな感じがして、龍子は瀑布に向つて、淋しく微笑んだ。男といふものは、えらさうに見えてゐても、女にかゝると、どうしてかう詰まらないものになるのか、と心の裡で嘲笑つたのが、顔へは淋しい微笑となつて現はれたのであつた。

弱き者よ。汝の名は男也。

かういふ字を、墨黒々と、高山の白い額に書いてやりたいやうな気がした。

木の間に漏れて、強い日光が照り付けた。龍子のバラソルの薄いフランス縮緬は、それを、防ぎかねて木蔭を求めて、瀑布の前を右へ寄り左へ避けた。それに連れて、高山も共に動いた。彼れはいつの間にか麥稈帽子を手にして、頭をば龍子のバラソルの下に押し込んでゐた。背後の方から、五六間ほど隔てた茶店に、いろ／＼と冷評の聲が湧いたけれど、瀑布の音が皆なそれを消してしまつた。何を言はれても、笑はれても、きまりがわるいとか、羞かしいとかいふ心は、既に龍子の胸から失はれてしまつてゐた。

たゞもう、すべてがうるさかつた。隣家の父子にうま／＼と女護の島を占領されて、まだ四十にならぬ母親が、惣六の後添ひになり、羊子が新三郎を夫にして、宮川の家と寺島の家とが、昔し行はれた日韓併合のやうに併合されようとも、今はもう自分の獨力でそれを防がうなぞといふ氣はない。宮川の方に豫てから其の陰謀があつたのを知らないのではない。自分が邪魔になつた爲めに、母親の病氣を機會にいろ／＼の策略の行はれたのも知つてゐる。自分の祕密を母親の口から小池に漏らして、自分の戀を破らせたなぞは、ずるぶん凄手手段だ。自分がこゝで死んでは、うま／＼と、そつくり其の手段に乗るやうなものだけれど、それも厭はぬ。自分はもう死にたい。自分には死神がついてゐるの

かも知れない。――

矢張りこれも、母方の遺傳からか、些か氣の狂れかけたらしい龍子は、こんなことをば、瀑布に面して、いろ／＼に考へつゝ、この瀑布がもう少し高く、この瀧壺が深かつたら、……なぞとも考へて、身を慄はした。

『今のお返辭は、性急のやうですが、成るだけ早く伺ひたいと思ひます。諸か否か、簡単にこの二つを――』と、高山はまた高い聲で囁いた。

『二三日考へさしていたゞくわけにはまゐりませんか。』

『二三日。よろしい。では三日の後にお返辭をいたゞきませう。』

平生の龍子なら、問題にもならぬこと、即座に拒絶して、相手の面皮を剝ぐべきことが、三日の後まで返辭を延ばしたのは、弱き者を……と憐れんだこの高山を翻弄して、事によつたら、死出の旅路の道連れにしてやらうと思ふ、棄鉢の心が働らいたからであつた。

宿へ歸ると、高山は其のまま、龍子の室へ跟いて來て、自分の晝飯をも共にこゝへ、と女中に命じてから、ポケットを探つて、『忘れてました、これをあなたに。』と言ひ／＼、取り出したのは、惡魔が其の大きな手に若い娘と老婆とを二つ、人形のやうに握り締めて殺してゐる童話の挿繪らしいもので

あつた。

『これがあなたのお姉さまの最後の運命でした。わたくしはよく知つてゐます。お話ししますから、泣いてはいけませんよ。』と、仔細らしく高山は語り出した。

二

高山の話に據ると、武子は姥ヶ谷の悪者どもに殺されたのが確かだ、といふことであつた。小池の家主の稲村も言つた通り、あの姥ヶ谷へさらはれて行つた娘ツ子はどう消えてしまふのか、かいくれ消息の知れたことがない。それがこの幾年の間に二三度もあつたといふのだから驚ろく、それに就いて高山は、かういふ話をした。

それは、今ポケットを探つて見せた、悪魔が大きな手で若い娘と老婆とを握り殺してゐる畫の説明から始まつて、この悪魔はいつも二人の人間を同時に取つて、一人の體に見せかけながら、食ふので一人だけは取つたことが知れないでしまふ。姥ヶ谷では、一人の公おやぢの死人があつた時、祕密の死骸をそれともにお棺へ入れ、二人を一人の體にして埋めるか、或は昔村に焼場があつた時分には、こつそりと巧みに焼いてしまつて、二人分の骨を一つの壺かじに入れ、どこ迄も一人といふことにして、高野山

にでも送つたのではあるまいか。武子が行方不明になつた折りには、丁度あの路傍のむさくるしい鶏飼ひの家の女房が高山夫人と同じやうに、井戸へ落ち込んで死んだ騒ぎがあつたから、あの死骸の埋葬認可證で、哀はれな武子の遺骸は、生前見ず知らずの薄汚ない中婆と柩を同じうして、あの部落の共同墓地に淋しく葬られてゐるのであらう。……と聞くも恐ろしいことを語つたのであつた。さうしてあの部落は驚ろくべく團結力に富んでゐるから、部落の祕密が決して外に漏れることはない、と言ひ足した。

自分の死に場所を探がす爲めにこゝへ來た龍子は、死ぬ前にまだ一つだけ仕事が残つてゐるのに氣づいた。それは姉の復讐であつた。これから東京へ歸り、警察の力をかりて、姥ヶ谷の討伐に向はうと思つたのであつた。

すつくと立つて、今にも出かけさうな龍子の様子を見ると、高山もあわてゝ立ち上りながら言つた。『駄目です、駄目です。顔色を變へて警察へなんぞ行つたつて、いけません。警察も姥ヶ谷には手古摺つてゐるんですから。……僕に考へがある、まあ暫らくお待ちなさい。今俄かに騒ぎ立てたつて、亡くなられたお姉さまが蘇生されるわけでもないんですから。それに、そんなこともあるまいと思ふが、若しやこの事件に、立松男爵が關係してゐられると、問題が大きくなるから、僕にお任せなさい。僕

がうまくやるから。』と、だん／＼昔の書生時代に復つたやうに、元氣な言葉で、ぞんざいな調子になつた。強く引き留られて、仕かたなく、食事を共にしてゐるうちに、龍子の逸る心も漸く鎮まつてくると、姉に對する弔ひの涙が劇しく込みあげて來たけれど、また一方には、幾分か高山の童話を疑ふ氣持も起りかけた。

其のまゝ三日を過ぎた、高山へ結婚の諾否を答へる朝となつたけれど、龍子はこの朝を別段氣にしてもゐなかつた。高山は自重してゐるのか、午前中は姿を見せなかつた。晝飯の濟んだ頃、のっそりとやつて來たが、決答の催促はしないで、いつもの通り、ヴェランダまがひの縁側に籐椅子を並べつゝ語るのを楽しんでゐた。

羊子へ宛てゝ、こゝに來てゐるといふ葉がきを出しておいたので、其の返事だけでもありさうなものだと思つて、龍子は郵便配達の影響がなく、橋の上を望んでゐた。すると、坂路をだら／＼登つて來て橋の上に立つた滞在中の浴客が二人、それは立松母堂と青木代議士とで、手を引き合はんばかりにして、欄に凭れたり、押しツくらをしたり、年にも恥ぢず、青春男女の如く、ふざけ合つてゐた。其の見苦しい情景を突破する風にして、驀に進んで來た汚ない自動車一臺。……車上には眼の色も血走つた小池の顔！

III

處女でないと思つて自分を棄てた男でも、この場合には、地獄で佛のやうに嬉しかつた。龍子が手早く顔をなほし、襟をかき合はしてから轉ぶやうにして、階子段を駆け下りると小池はもう玄關に立つて、居あはせた氣の利かない女中と押し問答をしてゐた。泊つてゐる客の名をまだよく覚えてゐない女中は、『寺島龍子さん？そんな方、おらツしやいませんよ。』とでも言つたのらしかつた。眼の色を變へて乗り込んで來た小池は、じり／＼して女中を叱り付ける。女中は膨れツ面をして、勝手にしやがれ、とでも言ひたげな風を見せる。番頭も氣の利いた女中も居あはさないもので、争ひがなほもつどかうとしてゐるところへ、龍子が駆け下りて行つて、『あらツ、よく來て下すツ わね。』と、怨みも忘れてしみ／＼言つたので、百姓の水喧嘩 最中に雨が降り出した如く、争ひは其のまゝ流れてしまつた。『よくも來ませんが、己むを得ずまたあなたにお目にかゝらなければならぬことが起りました。』

小池は、逃げるやうにして料理場の方へ行く女中を尻目にかけてあわてた心を無理 落ちつけやうとする風で、半分毒口を利いた。純眞な處女だとばかり信じ切つてゐた戀人が汚された身體であつたのを知つた絶望と忿懣とは、彼れの心をば鐵筋コンクリートの如くカン／＼に固くしてしまつたもの

と見えた。

死ぬ前にもう一度、小池に逢つておきたいが、それはとても無駄な希望であらうと諦らめてゐたのが夢のやうに突然其の希望が達せられたので、龍子はたゞもう嬉しくて嬉しくて、相手の顔色がどうあらうと、そんなことは顧着なしに手をとらんばかりにして、小池を二階に引き上げた。一人ぼんやりおいてきぼりにされた高山は、籐の椅子へ作りつけの人形、やうに身動きもしなで待つてゐたが、小池を見ると、さもく待ち設けてゐた珍客の到着したやうに、ニツコリ笑つて立ち上るなり、『どうぞこちらへ。』と、自分の椅子を譲つた。椅子が二つきりないから、一人は立つてゐなければならなかつた。

小池は今玄關で、氣の利かない女中を睨み付けたのと同じ眼色で高山を尻目にかけて、軽く會釋したゞけで、新三郎のを借りて來たのらしいセルの袴を裾長に引き摺つて、欄干に凭れ得るところまで、廣い縁側の端へ出て立つた。龍子もそれに引き添うて立つたが見下すあなた橋の上には、もう立松母堂と青木代議士との姿が見えなかつた。

『僕は凶い知らせを齎して來たんです。それをあなたに告げれば、僕の使命は果たされたわけになるのです。僕はすぐ歸ります。あの通り自動車も待たしてあります。』と、小池は息を切らしてゐるやう

風で言つた。さうして、じろりと龍子を睨んで、其の眼をすぐ、高山の短かく刈つた口髭の方に移した。二人が同じ宿の同じ室に居るのを怪しみ且つ憎んだのであらう。もちろんもう嫉妬といふものゝ起る筈はないが。

『どういふ御用でおいでになつたんですか。』

勝氣の龍子は最早や勘忍囊の緒が切れたといふ工合で、少しづつ反抗的にならないではゐられなかつた。

『どういふ御用？……さうです。あなたの唯だ一人の妹さんの自殺を知らせる爲めに、僕は來たのです。』と、小池は少し聲が震へたけれど、きはめて莊重に、驚ろくべき口上を言つてのけた。

『えゝツ。』と、龍子は椅子へ倒れかゝつて、氣絶しさうになつた。高山があわてゝ介抱しようとするのを、冷かに見ながら、小池は懷中から、『小ひさいお姉さまへ。』とした、羊子の哀はれた遺書を取り出した。

一三

羊子の死、驚くべき羊子の死は、いろくの事件の突發に脅かされつゞけてゐる女護の島の一家に

取つて、最も大きな最後の一撃ともいふべきであつた。それにしても、羊子は何故死んだか。十七の蕾の花はどうして、満開の盛りをも待たずに、もぎ取られ、むしりつぶされるやうな事になつたか其の理由は、哀はれな彼女が所謂『小さいお姉さま』に宛てた遺書につくしてゐる。

『小ひさいお姉さま。小さいお姉さまは決して死んではいけませんよ。小ひさいお姉さまの代りにわたしに死にます。わたしは、お母さまが、此の頃急に小ひさいお姉さまに辛くおあたりになつたわけをよく知つてゐます。小ひさいお姉さまにもそれはお分りになつて居りませう。お母さまは、大きいお姉さまと小ひさいお姉さまとをさしおいて、わたしに寺島の家を相ぞくをさせたいのです。大きいお姉さまはお嫁にやつてしまはれますが、小さいお姉さまは一生お嫁に行かない、と仰ツしやるでせう。それをお母さまは困つておいでになつたのです。そこへ大きいお姉さまがあんな事になつておしまひでしたから、このついでに、小さいお姉さまも片付けてしまはうとなすつたんでありませう。それにはお隣りのお小父さんの智慧がよほど加はつてゐるのを、わたしはよく知つてゐます。それを知つた時、わたしはもう自殺の決心をしました。わたしさへ居なければ、お母さんはそんな邪慳なお心におなりにならないで、いつまでも優しい、いゝお母さんでありませう。わたしが生きてゐては、どうしても、お姉さまたちに濟みません。……』

先頃母親の呑んだのと同じ色の赤インキで書かれてあるのが、ところ／＼涙に浸染んでゐた。これが可憐な妹の最後の涙の痕であらうと思つて、龍子は読みさしの遺書を、そつと舐めた。赤インキの字が血書のやうに見えて、小池も高山も皆な身を慄はせた。

『……わたしが死にさへすれば、寺島の家はもとのとほり、幸福になれるやうに思へます、それでわたしは、あの夜屋根の上の物干から飛び下りたら死ぬると思ひました。それがあんな事になつて、わたしが飛び下りるはずみに、お母さまや鶴やまでを、一しよに落ツこととして、濟まないことをしました。わたしが死んだ後、鶴や御免よ。と言つてやつて下さいませ、鶴やは可哀さうです。わたしは今朝もう一度お母さまに、小ひさいお姉さまを許してあげて下さい。と泣いておたのみしたのですが駄目でした。お母さまは小ひさいお姉さまが家をお出になつてからすうツと正氣なのです。何もかもお隣りの小父さんの計略でありました。そして、お母さんが近いうち、お隣の小父さんと御夫婦になつて、わたしとあのいやな／＼新ちやんとを結婚させるんですつて、わたしさへ死ぬばこの二た組の結婚は自然に破れるであらうと思つて、其の爲めにもわたしは死にます。小ひさいお姉さま、どうぞいつまでもお身を大切にあそばして、寺島の家を護つて下さいませ、お母さまをも、やがて正しい人にしてあげて下さいませ。さらば小さいお姉さま。』

島の護女



大正十三年六月十四日印刷
大正十三年七月十四日發行
大正十三年七月十五日發行

著者 上 司 小 劍
發行人 岡 村 久 壽 治
印刷人 吉 田 潔
印刷所 長 柄 印 刷 所
東京市芝公園九號地
東京市浅草區榮久町三五

定價金貳圓五拾錢

發行所 文 社

東京市芝公園九號地
振替東京一四一七七番

小池が涙ながらの言葉で、羊子の最期は、あの屋根の上の物干臺で、夜陰に萎れたのだと知れた。龍子は、遺書に浸染んだ羊子の乾いた涙の上を、自分の熱い涙で潤して、いつまでも啜り泣きに泣いてゐた。さうして、三十分間ほど後に顔をあげた時、もう涙は流れないで、或る強い決心が閃めいて見えた。

それから一ヶ月ばかりの後に總てが龍子の力で解決した。それには羊子の死といふ更らに有力な背景があつたからである。母親が先づ大いに感動して、もとの善良な母親に還るし、高山は自分の戀を棄て、龍子と小池との新しい結合のために、全力を注ぐし、小池もまた羊子の死に感激してゐる矢先へ、高山から、肉體的處女よりも精神的處女の尊ぶべきことを説かれて、遂に年來の主張を棄て、改めて龍子と將來を約することになつた。いづれも一家の相續人であるから、正式の結婚は後廻はしとして、事實上の結婚が、この夏中に、小池を寺島の聲にする形式で行はれ、秋には相携へて自費で洋行するといふ噂がある。女護の島は遂に女護の島でなくなつた。(をばり)

創作 一人歩む

吉田絃二郎著

四六版 美本
定價金壹圓八十錢
郵送料金拾貳錢

この人生の道は、所詮は一人歩むより他はない。一人で歩む道は寂しい。悲しい。しかしその寂しい、悲しい奥底より湧いてくる力こそ、真に強い、正しく生きる唯一つのものであらねばならぬ。紛亂、蕪雜、混妄の極をつくしてゐる現代に、この一卷を送ることによつて、書肆は一種の歡喜を感じてゐる。寂寥の國に住む人よ、苦患の道に憐める人よ、また豪華なる社會的勝利に酔つてゐる人よ、著者最近の創作集たる本書に行け。

長編 韓信の死

戯曲

長與善郎著

四六版 美本
定價金壹圓八拾錢
郵送料金拾貳錢

偉大なるもの、存在は、最も美しく、最も壯麗である。この寂寥の感深く、ひさり行路の間に放浪するが如き人生に於て、屹然として輝き立つ藝術の殿堂は永遠の美、永遠の生命を輝かしてゐる。著者は超人の持つ勇氣と偉大さを持つて、この壯大にして無限の自然の裡に、赤兒の如く生れ出た。さうして人類の生存に、善惡の超絶した力を鍛へた。ここに蒐めた「韓信の死」及び「頼朝」の二篇に於て、莊嚴なる藝術の殿堂は築かれた。

長編
創作

生まざりしならば

正宗白鳥著

四六版箱入美本
定價金壹圓八拾錢
郵送料金拾貳錢

正宗白鳥氏の藝術は渾熟の境を越えて清澄、既に聖境に在る。一作の出づる毎に、所謂文壇感激は深められて、その断片にして猶中樞の重きをなす威容を示してゐる。收むるころの長篇三篇、何れも人間に向けて、冷徹なる批判を興へたもので、その解剖は凄壯を極めてゐる。人間本能の愛欲に苛まれた魂の呻きによつて知るその本然の姿は、慄として呼吸ぐるしい生の壓迫を強調してゐる。その巨人のやうな颯爽たる風懷を見よ。

創作

鳩を放つ

藤森成吉著

四六版箱入美本
定價金貳圓
郵送料金十二錢

美しく、慈み深い愛の體驗によつて、この現實生活に正しく生きてゆく明星の如き光りを捕ふつゝある著者の姿は、徒らに悲しい顔を見せて人に訴へようとはしてはゐない。その面は顔真かに眠る女神の如く、その背光は慈眼豊に微笑む童兒の如く、青葉茂る森の中の噴水の音の静けさにも似てゐる。その昔、創世紀の中、方舟から放つた鳩の歸り來つたるその口に、橄欖の新葉を見て、はるけくも遠い再生の世界を思つた。いまこの著者が放つた鳩は、歸り來つて、何を語らうとするか、愛の世界は廣くそして深い。世界の人として生きゆく者よ、春の蒼空に放つた鳩の白き姿の如き清新なる愛の記録である。

創作
幻の塔

長田幹彦著

三六版美
定價金一圓八十錢
郵送料金十二錢

高い塔が立つてゐる。太陽の輝かしい光彩を浴びて、青い空に、くつきりとした輪廓を畫いて立つてゐる。大きい群集が、その塔をめぐつて、みんな塔へ上らうとしてゐる。その上に果して何があるのたらう。戀愛か、榮達か、富貴か互に争闘しながら上つてゆくほどの悦樂があるたらうか。人々よ。その高い塔の上つて、われ勝てりて歡喜に跳舞する時、その傷つきあつて血まみれになつた手を見よ、その塔が揺ぐやうに思はれることはないか。著者最近の力作。

終

